
何様、俺様、聖霊様

鷺見 みづく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何様、俺様、聖靈様

【Zコード】

Z20460

【作者名】

鷺見 みづく

【あらすじ】

妹を守つて車に轢かれた　と思つたら、異世界トリップして
いたようです。だがしかし異世界の王子様と恋愛などという流れは
すぐに断ち切られた。なぜなら私は実体のない聖靈様になっていた
のだから。

現在王宮動乱（傍観）編。

その1・私、聖靈になるの!」(前書き)

初めまして、鷺見みづくと申します。『何様、俺様、聖靈様』を楽しんでいただければ幸いです。

注意としましては、だんだんと残酷な表現を入れていく可能性が高く、あまりそういういつたものを好まれない方には不快に感じられる可能性があります。不快であると思われます方はここで引き返してください。

その1・私、聖靈になるの【ヒ】

気が付けば宝石の前に立っていた。いや、前じゃないな、上だ。宝石は大きさにして高さ十三メートル、幅五メートル、奥行き七メートルがあり、青と緑が共存した素晴らしいものだった。削りだしたらともかくとして、この大きさだったら軽く国家予算はあるんじゃないのかな。 その上に浮かんでいたんだから、私は一体どうしたつて言うんだろう？

私に何が起きたと言うのか、何故こんな場所にいるのか 分らない。だから少し記憶を辿つてみよう……。

初任給の手取りは十七万だった。税金とか天引きとかで抜かれたけど、初めてのお給料となると感慨深いものがあり凄く尊いものに思えた。のだけれど。

「ねえねえお姉ちゃん、お給料出たんでしょう？ 服買つてよー！」

「今お姉ちゃんお金持ちでしょ？ ゲームしてばっかしないでさ、買い物行こうよー、服買つてよー」

ちょうど給料日の翌日が土曜日だつたからか、腰にすがり付いて妹が服だの鞄だとねだつてくるのを引き剥がし、ベッドの上に放り投げる。ええい、今翼人を撃破してあるのだ邪魔をするな！

「わーん、無体な！ あーれーお代官様ー！！」

「誰がお代官様じゃ！ あんたには色々と奢ってくれる彼氏がいるでしようが、この金は貯金に回すの！ あんたには一銭も使いませ

ん

「よつ君は別なの！ 私はお姉ちゃんと買い物に行きたいのよー！」

！

私の妹は美人だ。同じ両親から生まれていることは分るくらい私たちは似ているが、妹は両親の良いパートの組み合わせで生まれたけど私は凡庸な組み合わせになった。横に並べば姉妹と分るのにこ

の差は歴然としていて、友人からは良く慰められたものだ。あんた

はボーアイツシユ路線で行け、と。どこが慰めなのか分らなかつた。

そしてそんな可愛い妹には蝶^花と言えば聞こえは良いが、蝶や

ら蛾やらが群がつて来る。で、妹はその中でも両親も認める好青年である洋介君とお付き合いをしているのだ。実家が裕福なご家庭で、本人も少しあつとりしているがしつかりした青年でとても好ましい。美人は見る目がないとか言うけど私の妹に限つてそれはなかつたようだ。良かつたね我が妹よ。そのまま「ゴールインしてくれても私たち構わないって思つていいよ。

「私ど、ねえ」

「うんうん！ お姉ちゃん最近ネトゲばっかりでしょ！？ 可愛い妹と遊ぼうとは思わない！？」

そういうえばこの妹は、こんな平凡な私を好いてくれるなかなか奇特性の主だった。高校時代ネトゲにハマつてヒッキーと化していた私に良く愛情表現ができるものだ。もちろん今でもネトゲは大好きだが昔ほどじやかない。

「しゃーね、行くか」

「わーい！ お姉ちゃん大好き！」

「それは洋介君に言つてあげな。洋介君泣いて喜ぶよ」

抱き着いてくる妹をいなしパソコンをスリープにし、私は室内着から外出着へ着替える。流石にスペツツにTシャツで外には出られない。

「お姉ちゃんお金持つた？」

「私にたかるな」

一応三万くらい持つていれば映画見たり何か買つたりするには足りるだろう。千円札が一枚入った財布に諭吉さんを三人追加し、実用一邊倒の鞄に財布を突っ込んで部屋を出る。妹は服の用意をしていたのか意外に早く用意を終えていて、白いワンピースにふわふわの上着を着ていた。上着の名前なんか分らない。カーディガン？ キヤミソール？ キヤミソールって何だつたつけ？

少しサイズが大きめのシャツにジーパン姿の私に対し、妹はなんと可愛らしいことか。友人をして谷女（胸がえぐれている）と言わしめた私、きよぬ一族ではないものの上着の上からでも分る胸の持ち主である妹。街へ出ると街頭アンケートのねーちゃんに『そこのお兄さん』と呼びとめられる私、軟派男が次から次へと絶えない妹。ちょっとと情けない気もするが逆ハーレムを作りたいなんて願望がないから別に羨ましくはない。

腕に絡みついてくる妹と電車で街へ出る。三十分もせずに着いたそこは県内でも開発された都市で、『街に出る』とはここへ来ることを言ひ、ちょっと値が張るが美味しい店とか某屋根裏部屋とか、色々と回つて遊んだ。妹のことは嫌いではない。それどころか好きだ。

友人と一緒に遊ぶのとは違う気安さにいつの間にか私も遊びに熱中し、気が付けばもう夕方の五時半を回っていた。我が家の大食は七時前、そろそろ帰るべきだろ？？ということで妹に連絡を任せる。信号を渡ればすぐ目の前は駅だ、帰り道はテンションが下がるから気をつけないと、と疲れた頭で考える。妹が母さんと談笑しているのを横耳で聞きながら車道の信号が赤になるのをばんやりと待つていた、その時。

暴走した車が、十字路を直角に曲がつて現れた。電話に夢中の妹はチラリとそれを見ただけですぐに会話に意識が戻る。駄目だ、話に夢中になつている場合じゃない……！妹は少ししか見ていないため分らなかつたようだが、車はそのまま私たちのいる歩道へ突っ込んでこようとしていたのだ！

どうする、どうする！！妹は顔を蒼褪めさせ、助けを求めるようく私を見つめた。妹の大きな瞳がこれでもかを見開かれている。私は恋人はない。友達はいるにはいるが、私の死をいつまでも引きずるタイプじゃないだろう。だが、妹には洋介君がいる。私は笑つた。妹を突き飛ばし、ついでにその場にいたおばちゃんとちつち

やい子の一人連れも突き飛ばした。そして

「いやああああお姉ちゃん！！」

妹の悲鳴を聞きながら、意識を飛ばしたのだ……。

さて、それでは今の状況を良く考えてみよう。私は半分透けている。そしてなんともはや浮いている。周り鬱蒼と茂る森。これはもしや、異世界トリップと言つのではなかつただろうか。妹よ、君のお姉ちゃんはどうやら異世界にきてしまったようです。

「とか、ないないナイン」

ありえない。靈体でトリップとか、それも人気のない森の中とか寂しそぎる。本当にもう……美形の王子に拾われて逆ハーレム！とかじやなくて良いからさ、人間と触れ合える方が良かつたよ。ていうかハーレムは妹で見慣れているから是非とも遠慮したい。あれは男たちの目が怖かつたのなんの、『男だらうが女だらうがコイツに近付くんじやねエ！』と言わんばかりの目で睨んできたくせに、私があの子の姉だと分るとすり寄つて来たあの汚さよ。でも異性に対する幻想が早々に打ち砕かれたおかげで悪い男に引っ掛かるこどもなく、男に引っかかる代わりに女が引っかかったことが頻繁にあるけれども、二十数年を気楽に過ごさせてこられたわけだから良

かつたといふべきなんだろ？「うん。

「はあ……」

ため息を一つ吐いて体勢を変え、足元の巨大な宝石　　というよりは宝岩に腰かける。これは石じゃありません、岩です。

重さのあまり地面に深々と刺さっているようで、きっとこれは全長十五メートルを越えているに違いない。ここがどんなところのかは分らないけれど、きっとそのうちここにも人間がやつて来て私を切り売りして行くに違いない　　って、あれ？

「何で『私』とか考えちゃってんの？」

この岩が私なはずがないじゃないか。私はただの靈体であつて石なんかじゃない。撫でるように岩の表面をくるりと触ればなんだか温かいものが伝わってきた。岩が発熱しているわけでは……ないよね。心まで温かくしてくれそうなその波動は掌から伝わり腕を駆け上り、心臓まで届いてから全身に波紋状に広がった。知識、いや、この宝岩の記録が伝わって来る。大地が生まれると同時にこの地に注がれた『神の恵み』^{マナ}が数万年の年月をかけて成長したものが、この宝岩。そして長い年月を経て得たのが　　私と言つ自我。……あれ？　おかしくない？

普通、自然発生的に自我が宿るものだと思つていたんだけど違うのだろうか。私が特殊なのかそれとも精靈とはそんなもんなのか。これじゃあ全国の異世界トリッパーさんたちは皆聖靈になるのか？

それはないか。きっと恋愛や冒険に心躍らせていらっしゃるに違いない。私と違つて。

それにもしても、これでは異世界には来られはしたけど恋愛方面に行けないな。誰が好きこのんで半透明で後ろが透けている女と恋をしたいもんか。責任者連れてこい責任者。そりゃあ男に対して夢なんてさつぱり抱いてないけどさ、恋の一つや二つじてみたいと思う乙女心が分らんのか。これは酷すぎる。

「はああああ……」

私は膝を抱えて長々と嘆息した。周囲に人の気配はない。孤独死

とこう言葉が浮かんだが、精霊に死の概念はなぞやつだつた。

その1・私、聖靈になるの」と（後書き）

10 / 10 加筆。

その2・私、真剣に考えるの」と

いつまでの岩の上に浮かんでいるのもつまらないから地面に降り立つた。足の裏に違和感があり、見れば 草が物凄い勢いで成長していた。びびって片足を浮かせると瞬時に枯れしていく。「これは……リアルシシ神！」

「ははは、なんてこいつた……まさかシシ神になるとは思いもしなかつたよ」

夜にはでいらぼっちになるんだろうか、遠慮したいけど。サクサクと周囲を散策したら、どうやら私の移動可能圏内は岩を中心とした半径百メートルの半球という狭いものだと分った。上空から見るに付近数百メートル内に川もなければ人の姿もない。……私の自我をここに持ってきた超的存在がもしいるというなら 何でこうなつたのか是非ともお聞かせ願いたい。もし変な理由だつたりしてみろ、ぬつ殺す！ ジャなかつた、ぶつ殺す！

宝岩の前に着地する。膝を抱えて成長と死を繰り返す足元を眺めながらこれから終わりが見えない人生を儂んでいると、カサリといふ音がして動物が姿を現した。鹿だ。つぶらな黒い瞳が可愛らしく、大きさからして成獣なんだろうけど首を傾げる所作やら何やらが一々可愛い。狙つてしているわけじゃないと分るからこそ癒されるというか。妹自慢になるけどあの子も可愛いんだよ、私がいくら無視しても泣きながら縋り付いてくるところとか本当に可愛かった。でもあの時はゲームの方が大事だつたからウゼエとしか思わなかつたんだけど。妹よすまなかつた、お姉ちゃんが悪かつた。

「おいでおいで、メリケンかめやー」

駄目元で手招きしてみれば危機感なく近寄ってきた。ちょっとこの鹿さんには危機管理について教育する必要がありそうだ。私が悪い人間だつたらどうするつもりだつたんだろうか。ゴードン・スミスみたいな頭の弱い勘違い野郎がいたらどうするんだ。あの野郎、

雉の狙い撃ちが好きな癖に鯉の生け作りを野蛮だとか書きやがった。野蛮なのは貴様だ。 つと、いかん。考えが逸れた。

「よしよし、よーしょーし良い子だ」

頭を私に押し付けてきた鹿の頭をわしゃわしゃと撫でる。ん？触られる……？ ちょっとびっくりして両手を見下ろせば、やっぱり向こうが透けた体。透けているのに触ることができるのはとも面妖な。つぶらな瞳が『もう終わりなの？』と言わんばかりに私を見上げてくる。笑いながら頭や首を撫でくり回していくと、笑い声に釣られて じゃないだろうな 動物たちがどんどんと姿を現した。

「肉食獣と草食獣がなんで同じ場所でリラックスできているのかは……気にしない方が良いな」

草食動物は逃げ出そうとせず、肉食動物は襲おうとせず。地上の楽園だと言わんばかりの光景が今、私の目の前に。どこのファンタジーだよおかしいだろ？ でも突っ込んでどうにもならない気がする。

「ふつ……で、どうすりや 良いんだろ？」

私は自覚ありのゲーマーだ。戦国バラとかそういういつたゲームは苦手だが、街を作つて害獣駆除して、といったゲームはかなりやりこんできた。今日だつて街を作つていたところを妹に襲撃されて、仕方なく出かけたのだ。楽しかったから良いんだけどね。だが、そのゲームの知識がどこで活かされると言うのか。ここらはただの森、それも人里もきつと遠い。何もしようがない。つまり私は暇人にして駄目一ート。まるで駄目な女略してまだお。なんてこつた 汗と涙の就活を終え、内定もらつて内々定もらって、やつとこさ一月とちょっと働いたと思つたら。

そして私は失意のドン底へと落下した。人間と言つものは何から役割を欲しがるもので、『何もしなくて良いよ、ただ存在していれば良いんだ！』とばかりに何をするでもなくただひたすら動物と戯れていなければなくなつたら 嫌になるのだ。色々と。

「何でだよ、ホント、何でだよ。いつの時は神様が土下座して『
テヘッ つかり手が滑つてヨロコビエレーシチャつたんだ
願い事を三つ叶えてあげるから文句言わずに転生して』とか言
うものじやないのか?」

有無を言わさず転生、それも宝瓶の聖靈になるとありえんティ
ー。

ひたすらグダグダと岩の周りで寝転がる生活を始めて数週間が経過。私は書くものがないのを悔みながら脳内でリリなのー一次創作を展開させていた。あの作品どうなつたんだろうか。作者さんが毎日更新してたからもう更新されているはずだけど。うん……女子向けの恋愛ものを考えていないあたり女を捨てている気がする。

見る人間がいないから地面に転がってヨガしたり聖靈としての能力を試してみたり、まあ自由で気楽な生活と言えばそう言えるだろう。話し相手がさっぱりいないことを除けば素晴らしい生活だと私も思ひ。せめて画面の向こうにでも良いから話し相手が欲しいもん

だが……生身のお友達ができるよりも可能性は低い。

「あーいーうーえーおー」

口を動かさなければそのうち口の動かし方を忘れ、念話みたいなものを使って 力を求めるのですね、勇者よ…… みたいな腹話術をすることになるかもしだれん。それはそれで恰好良いかもしだれけど、傍目から見たら何もつたいぶつてんだこの女としか思えないから却下。

「かーきーくーけーこー。隣の客は良く柿食う客だ！」

あいうえお表を終え、今度は両手両足をバタバタとさせながら早口言葉や名台詞を叫びまくる。

「おれはからだは悪魔になつた……だが人間の心を失わなかつた！」「あれ、これつて悪魔を聖靈に置き換えればまんま私のことじゃないか？ デビ マンだつてこう言つているんだ、私も人の心を失っちゃいけないだろう。 いつまで保つか分らんけど。私は人々人間なわけだし、人と会話しなきや自我を保つていられない弱い生き物だ。だから一次創作でよくある『俺はウン十年の間無人の荒野で修行し、ここまで強くなつたんだ！』というのはよほど精神が人間を超えた出来でもない限り不可能だと思つてゐるわけよ。悟りを開いた人なら別だけど、現代で高校生とか大学生していた人間が精神的にマッスルとは全く思えない。つまり私の健康的な精神状態は数力月から数年保てば良い方だと思われ、それ以降は人間を止めてファンタジー小説で良く出てくる滅私的存在になつてゐるか、重度の躁うつ症になり理性的な会話能力を失つてゐるかだらう。どっちも救いようがない状態と化してゐる気がする。

「飛ばねえ豚はただの豚だ……」

そして会話を忘れた人間はただの猿だ。 私は理性を保つているうちに会話の相手を見つけられるのだろうか？ それとも理性を保ち続けるための術を見つけることができるのか。 人間がこんな森の奥深くまでやって来るのは思えないから、後者の方が可能性としては高い。 その一、私の精神的な時間を止める…… やり方が分らん

から不可能。その一、「とりあえず」と寝続ける……この体でも眠ることができそうだから可能性はある。ただ起きられるかは不明でそのまま永眠するかもしれない。ちと怖い。その二、「永眠するつもりで眠る。どうせ一度死んでいる。

「なんて三択だ……中の二つなんてすること一緒にじゃないか」
ゴロゴロと転がって右に背を向けなんとはなしに森の方を見れば口をあんぐりと開いている青年がいた。平凡な見た目のどこにでもいそうなヘタレだ。見た目的に。

「…………ん？」

驚きのあまり声が出ないらしい青年に目を瞬かせる。なしてこんな辺鄙な場所に人間が。早くお家に帰らないと村で待っているだろう恋人が泣くよ。実際にいるかいな? かは別にしても、両親が泣くよ。

「…………ん?」

あれ、私ってばさつきまで何について考えていたんだっけ?

その2・私、真剣に考えるの！」と（後書き）

10 / 10 加筆。

その3・私、守護聖靈になるの」と

青年の名前はエルといつそうで、農民なのだと。そのエルが何でこんな森の奥深くにやつてきたかを訊けば、何やら「」よりも視線が私と地面をチラチラと往復する。女らしい奴だな……」について時代の男つてものは『黙つておれについてこい』タイプじゃないの？見た目は優男だし性格は軟弱で優柔不斷だし、初めて出会った異世界人がこんなのだつたと思うと泣けてくるね。身長だつて高ければ良いといつわけでなし、ただのひょろ長い兄ちゃんでしかない。

「その……好きな人が、いて。その人に何かプレゼントしたいんですけど」

「はあ」

それがどうして私のところに来るのに繋がるんだ？

「だから綺麗な石をあげようと思つて……」

「ふむふむ」

綺麗な石ね、なるほど。女の子つて物は綺麗なものを喜ぶもんね。エルの恰好から見るに文化レベルは古代。もつちよつと文化が発展すれば宝石だなんだと言つようになつて来るんだろうけど、今のところ宝石は『他よりもちょっときれいな石』程度の認識らしい。カッティングの技術もないだらうし、宝石がちやほやされるまではまだ時間がありそうだ。

「だから、聖霊様の一部をぐださーーー！」

「は？」

一部　　ああ、この宝石のことか。そうだよな、この岩綺麗だもんな。異常にでかいことを除けば女の子が喜びそうな色だし。よしよし、優しいお姉さんがここは一肌脱いで欠片をくれてやるうぢゃないか。その欠片を基点に色々と周囲を見聞できるようになつたら良いなーといつこいつの都合は言わないことにして、聖霊になつてから使えるようになつた神通力で岩を碎く。細かい破片が散つたけ

どすぐに地面に吸収され、その地面からは私が踏んだ時のように草が急激な速度で成長し始めた。動物に与えたら凄いことになりそうだ

実験したら危険だらうな。某もののけのプリンセスのように巨大な獣が大量生産される氣がする。そんなことをしたら私は本当にシシ神になつてしまふ。それは是非とも避けたい。でも今みたいに植物にばかり『神の恵み^{マナ}』を分けてたら王蟲の森と化しそうだ。

与えない方が良いのだろうか……？

「これで良いかな？」

「あ、あつ有難うござります！…」

我ながら良い仕事をした。自分の分身というか本体だからか、どうカットすれば一番綺麗に見えるかが分っていた。手渡せばエル君は嬉しそうに私の欠片を抱きしめる。さて、欠片と私の感覚は繋がっている。システムオールグリーン。よしよし。

「ところで。私の姿を視認できたのは君が初めてだ」

そんなのは嘘だ。

「と言うわけで君に私の加護を与えるよ」「もちろん嘘だ。

「その石を大事に持つていなさい。私が君を守護しているという証になるから」

我ながらなんといけしゃあしゃあとそんなことを言えるものだ。数週間前までの私なら『嘘を吐くことに躊躇はないのか』と聞かれればあると答えただろうが、今の私はそんなことを気にしていられる状況じゃない。誰かと会話しなけりや理性を保つていらなれないのなら『イツを使えば良いじゃない。

「せ、聖靈様……！…」

感動のあまり泣き出したエルをそんぞいに慰める。

「よーしょーしょーしー」

「うひ、うひ……俺、村でもへタレって言われてて……！」

その通りだと思う。それからエルの愚痴は続き、役立たずやら木偶の坊、ウドの大木、果ては無駄飯食らいとまで言われているのだ

とか。つまりそこまで農民として絶望的だということで、ちょっとお兄さん生まれてから今まで何してきたのと訊きたくなつた。お手伝いはしてこなかつたの？ してきただでしょ？ なら何で出来ないの。体力がないならつけられれば良い、畑を耕すのが得意じやないなら練習すれば良い。

「で、でもっ、俺っ！」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら何か言い訳をするエルに、私はちょっとばかし失望した。文句を言うだけなら誰でもできるんだ。行動しもせずに嘆くだけの男なんて生きているだけで邪魔だ。無駄飯食らうと呼ばれる原因は本人にある。

私はさつさとエルを追い出した。あんなのと会話するくらいなら次の訪問者を待つほうが何倍もマシだ。早く次の人人が来ないかな。と、そう思つていた時期が私にもありました。

『森の聖靈様の加護を頂いたんだ！ 僕が！』

誰が加護をくれてやると言つた。 そういうえば言いましたそんなこと。

『俺は王になる……この国を統一してみせる－ 聖靈の加護は俺にある！』

加護なんてしどりんつちゅーに。

キングオブヘタレ・エルに渡した私の欠片を媒介にエルの周囲を観賞してたら、いつの間にかあのヘタレ野郎は私の加護のもとにとかほざいて戦争を始めやがった。わたしの一部を削って作つたらあれ自身に癒しの効果があつたらしく、私を使って怪我人を治すことで人気を得ていつた。畜生私の欠片を返せ。くれてしまつたものはもうどうにも取り返せないけど、こんなことになるなら私だってあんな奴に野郎とは思わなかつたさ。好きな女の子にやるんじやなかつたのかよ。なんで途中から配下に加わつた美少女と乳繰り合つてるんだ？

そしてエルは国を建て、『丁寧にも私の暮らす森を伐採して首都にしやがつた。城の真ん中に安置された私はおいそれと人の前に姿を現すわけにもいかず、またあのクソヘタレ男が死ぬまでは姿を現してなんかやるもんかと怒り心頭で岩の中に隠れてやつた。そしたらまた『俺の前にだけ姿を現してくださいさつたんだ』とか言い出したから呪い殺してやろうかと真剣に思い悩んだ。でも一応私は『神の恵み^ナ』の一部であつて癒しと命の象徴だから呪殺できなかつた。ちくしょう。

その4・私、王太子と対面するの」と

私は、といふか宝岩は、『神の恵み』の一一種である日の光で大きくなつていて、宝岩に記録されている情報によると宝岩は空から降り注ぐ『神の恵み』の余剰分を集める機關らしく、私が集めなければ余つた『神の恵み』が暴走する可能性があるのだとか。ついでに暴走したら街が王蟲の森になつたりもののけプリンセスっぽい動物が大量発生したりする。試しに与えなくて本当に良かった。

ところで、私は今お城の中心に安置されている。屋根付き一戸建ての廟が建てられていて日光なんて浴びられるはずがなく……そろそろ大気中の『神の恵み』が許容量オーバーする頃なんだよな。丈夫だろうか？ 一応私の安置されている廟は風雨を防ぐだけのつもりだったのか壁がなく、周囲の『神の恵み』を吸収するには問題なかった。でも直接と間接では差が開いてしまうもので、この国が建国されてから早一百年ほど過ぎた現在は今にも水が零れそうなコップの状態だ。

でも私にはどうしようもないし放置してれば良いやと思つて気にせずについたら、各地で動物の巨大化や人里の樹海化が頻発し始めた。未知の怪物と急激な森林化により人々は恐慌状態に陥り、『きっと王家が何か悪いことをしたに違いない、聖靈様の罰なのだ！』とか言い出したらしい。良いぞ、もつとやれ！ 原因の半分はその通りだ！

現在の王は小心者で、建国であるあのエルと性格がそつくりだつた。自分に自信がなく、そのくせ巨大な権力に酔つた節がある。甘い言葉を吐く者しか身近に置かず、それを諫めた者を左遷したり蟄居させたり、殺さないだけましだがかなり情けない男だ。だから、その息子である王子も似たような性格をしていると思つていたんだ。父の背を見て子は育つと言つし、似たり寄つたりの坊ちゃんなどばかり思い込んでいた。

「聖靈よ… もし私の声が届きますならば、どうか、どうか！」降臨
ください！」

それが思い違いだと分つたのはまあ、その王子様が私に直談判に来たからに他ならない。どうやら肉体派らしい彼は引き締まつた体つきに軸のぶれない歩き方をした青年で、今の王より好感が持てる。彼は私を見上げて声を張り上げ、民草が無為に命を散らしていることを切々と訴えた。人間止めて二百年も経つたからだろう、人間に対する同族意識と興味が失せていた。だけど 助けを求めてくる者を無視するほど非道なつもりないし。

「私を呼んだのは君だね？」

さも今氣付いたと言わんばかりに言えば、王子は迷いなく頷いた。長いこと宝箱の中で引き籠つていたから元の姿を忘れてしまった… 仕方ない、微妙に覚えている妹の姿を借りれば良いや。

「貴方様が…ハッ…！ ご無礼を！」

私が現れたのに立つたままだったからだろ？、王子は一瞬呆けた後跪いた。そのつもりがさっぱりなかつたとは言え私は建国に関わつた聖靈様なのだから。深々と頭を下げたまま王子はさつきと同じことを繰り返し言つ。眞面目な性分なんだなあ。

「各地では樹海が広がり、巨大化した獸が人を襲つております… 聖靈様、どうか我らに力を貸してください！ このままでは我が国は滅びてしまう！」

ガバツと顔を上げて懇願する王子にちょっとビビる。王子つてばかなりの美形じゃないか。私は美形が苦手なんだよ妹のハーレム思い出して。近寄るなシッシッシ… とかやつたら泣くだろうな… 。いくら私が美形嫌いでもそれとこれは別だよな。

「樹海の拡大も獸の巨大化も私の本意ではない。でも、君に力を貸してあげたいのは山々なんだが私には戦いの力はないのだよ

「そんな…！」

私が癒し専門だということは意外に誰も知らない。私の加護が付いてるんだ… ！！ とハッスルしたヘタレ王エルは戦争で勝つて

国王に昇りつめた。だから戦の守護聖靈（ほほ神様みたいな扱いを受けているけど）とか国の守護聖靈とか言われ、癒しの部分は忘れられてしまったのだ。

「だが私とて出来ることがある。私を覆うこの廟を解体し、私を日光の下に晒しなさい。そうすれば私がどうにかしてあげよう」
こんなに真剣に民を思っている人なんだから助けてあげるべきだろう。民草のために心を碎いている王子には好感持てるよね。よし、お姉さんが何とかしてあげようではないか。私が放置した結果だとかそういうのは気にしない方向で。

「聖靈様のお気持ちは有難く、そのお優しい御心に縋りたいのは山々。ですがこれは人がせねばならぬこと……聖靈様に頼り切っては我々は努力を忘れてしまつ」

なんか恰好良いことを言い出した！ でも先に助けてって言いだしたのはそつちじやなかつたつけ！？ ほんの数分前のことのはずなんだけど、どうやら私は耄碌したらしい。一二百年も生きているから記憶力にガタがきたんだろう。なんてこつた……。

「一百余年の沈黙を破り私の前に姿を現してくださったことには感謝の念に絶えませぬ。ですが御身を煩わすことは出来ますまい

御前、失礼いたします」

……言いたいことだけ言つて出て行つたよあの人。自分が力を貸してくれつて言つたくせに、こっちが貸そうとしたら断わるのかよ。どっちだよ。困っているんじゃないのかよ。人の言うことを聞かないのはエルの血なのか？ 思い込みで突っ走るなよ！

私の行動範囲は周囲百メートルで、そして何の因果かは知らないが、私の置かれている廟の周囲百メートル四方は庭と神殿（といつても小さいものだけど）しかない。性根の腐った神官共の前に姿を現したくなんてないし ビーブリ君というのだ。

そして数年後、あの軍人王子は右目を失つて帰ってきた。流れ作業で王位を継ぎ、一生を巨大化獣（いつの間にか魔獣と呼ばれるようになつていた。可哀想に）や王蟲の森化した山林（いつの間にか死の森と呼ばれるように以下略）でアドベンチャーするのに費やした。人の話を聞かないところになるんだなと心から思わされた。

番外1・人、舌鼓を打つのこと（前書き）

王子の出番が一回限りは寂しいぜ、ところが」と。

番外1・人、舌鼓を打つのこと

大神官は今日も毎日のお供えを終え、背筋を伸ばし軽いため息を吐いた。毎日聖靈石に水と果物を供えるのは大神官の役割である。季節の祭りや王室行事などのイベントがない今の時期はそれくらいしかすることがなく、あとするべきことと言えば割増請求で懐を温めようとする神官^{クン}ややる気のない神官^{ボケ}の評価を下げて彼らの給料を減らすことくらいである。

「ふ、ふ、ふ……」

大神官は昨日供えた果物を手にいそいそと自室へ向かう。前日のお供え物を食べるのは彼の楽しみの一つなのだ。前代の大神官は食べずに捨てていたらしいが、なんともつたないことをしたものだろうか？ 聖靈石の前に置いておいた果物は『何故か』美味しくなるのである。食べずに捨てるなど出来ようはずがない。

軽くなる足取りを自覚しながら果物を入れた籠を抱き部屋へ入った。机の上に置いて棚から愛用の果物ナイフと皿を取り出し、サクリと食べやすい大きさに切つて口へ運ぶ。じゅわり、と口の中に広がる果物の甘さと爽やかさに顔が自然と綻んでいき、彼は今日も聖靈に感謝の祈りを捧げるのだ。

「いやー、本当に聖靈様さままだよな。俺菜食主義者になつちまいそう」

以前試しに野菜を聖靈石の横に置いてみたことがあつたが、この世のものとは思えないほど美味しかつた。さすがに腐りやすい肉類を置くことはしないが、もし置いたらどうなるだろつかと思つと口中に唾液が溜まつた。

「大神官サイコー！ ふふふ、ふははは！」

本来の彼は自堕落で不真面目であり、大神官などという責任の大きい仕事などお断りだと思っていた。だがすべては果物のため食は人間を変えるのである。また彼は生来体の弱い性質であつたが、

大神官になつてから病氣知らずで体力もついた。まさに聖靈の「」加護だと彼は信じている。

果物もあと三切れを残すばかりとなり、彼は明日に思いを馳せながら残りを味わっていた。大神官としての義務も責任も、美味しい食べ物の前には軽いものである。彼は毎日が幸せだった。

だが幸せとは不幸があるからこそその素晴らしさが分るものである。聞こえてきたのは幼馴染である男の大声、悲痛とはかくあらんと言わんばかりの悲鳴、「大神官様呼んで来い！」という叫び声。彼は立ちあがつた。皿の上にはまだ一切れ残つていた。

「どうしたのですか？」

「大神官様……ああ、陛下が！」

なぜなら彼は大神官。いくら彼が本当は口が悪いとしても、それ

を下級神官たちの前で披露するわけにはいかない。最近は丁寧語も板についてきた気がする。

部屋を出て騒音の元へと向かえば、両腕に神官たちを鈴生りにした背の高い男が暴れまわっていた。男は魔獸により右の視力を失ったはずだが、どうして右の死角から飛びかかる神官を殴り伏せられるのかはなはだ疑問である。

「陛下！」

大神官は男に この国の王に走り寄る。これ以上暴れられては神官たちが大怪我をするだろう、止めねばなるまい。王はその強面をピクリと動かした。それが笑つてている証しだと分つてしまふ彼は自分が悲しかつた。

「大神官様！」

「助かります、ああ、陛下をお止してください！」

涙眼の神官たちがわあわあと彼に縋り、縋られても邪魔でしかないので振り払う。彼と国王の身長差は頭半分ほどであろうか 彼は国王を見上げながら長嘆息した。

「今日は一体何の御用ですか、陛下。また聖靈石の前で数日過ぐ」されるおつもりで？」

「その通りだ。聖靈様の前に立ち、聖靈様のご降臨を待つ「降臨されるかも分らないのに？」

「必ず来られる。一度私のために降臨されたのだから」

降臨しないと納得するまで聖靈石に話しかけるのだろうが、はつきり言つて迷惑でしかない。政務は滞るし神官たちも緊張して失敗を繰り返すし、いい加減諦めてくれれば良いものを。

「……皆さん、陛下を放して差し上げなさい。陛下はこうなつたら意地でも人の話を聞きましたから」

国王は人の話を聞かないというか、人の話を曲解して自分の良いように解釈する天才である。彼はこれと幼馴染をしてそろそろ三十年になろうとしているが、一緒にいて得たものは学力や優れた人間性ではなく譲歩と諦めであった。

「ですが大神官様！」

「陛下が人の話を聞かないのはいつものことではないですか。もう諦めるべきです」

そう。諦めこそがこの国で出世する第一歩なのだ。悟った表情でそう説く大神官の姿はその場の皆 国王以外の 心を打つた。そういえば大神官様は陛下の幼馴染だったよな、じゃあ俺たちの何倍も苦労されているんだろう。大神官様お可哀想に……！

神官たちは滌々国王を放し、国王は当然だと言わんばかりに鷹揚に頷くと聖靈石の元へと向かつた。その背中を見送り、大神官は集まっていた神官たちに命じる。

「陛下などこの場にいないと思つて行動しなさい。緊張のしすぎで怪我などしたら大変ですからね」

あの男を風だと思えばさほどイラつかない。風はただ吹くだけであり、こちらが説得して風向きを変えようなどできるはずがないのだから。

そう言い切つた大神官に皆涙する思いであった。ここまで悟るのに彼は一体どれほどの苦労を重ねてきたのであるか？ 自分の代わりに嘆く彼らを置いて、彼はさつさと自室へ戻る。他人の慰めも同情もいらない。彼が望むのはそう 美味しい果物だけであった。

その5・私、少年元氣のいろ（前書き）

今回はつねにそのため少しこいつもよつとも短いです。

その5・私、少年に会うこと

だんだんと巨大化獣や樹海化が皆に『当然のこと』として受け入れられるようになり、数十年もすれば天罰マナだと天変地異だとか言わなくなつていった。私は私で必死に『神の恵み』を吸い取つてどうにかしようとしているけど、直接と間接じやあやつぱりどうにもならないものがある。巨大化獣、ゲリラ的樹海発生に続きついに、人にも影響が出始めた。魔法を使える子が出てきちゃつたのだ。

『神の恵み』は基本的に種の可能性を最大限に引き出すことを目的としている。つまり私の一部を使ってエルが披露した癒しの力も私が踏んだ場所から草がスピード再生みたいに生えるのも、私が人体の回復力を最大限に引き出し草の生命力を最大限に引き出しだが故なのだ。でもまあ一応私にも可能なことと不可能なことはある。攻撃を目的として『神の恵み』の力を使えないことだ。攻撃対象なんていなかから別に良いんだけどね。

話はちょっと戻るけど魔法の話。ここ一、三十年で大気中の『神の恵み』^{マナ}を吸収して利用できちゃう子が三百人に一人くらい現れるようになつた。神殿は私の加護だなんだと言つてその魔法使いもどきたちを神殿に集めて教育しているみたいだけど……プロがないんだから十分な教育ができるはずがない。本当に大丈夫なのかよアレ、と思いながら観察していたら　少年が一人、私の元へ通うようになつた。

どうやら彼は私が今までに見てきた子の中でも一番魔力、じゃなかつた、『神の恵み』の精製度が高い。でもその高さが原因で魔法の効果が良すぎてしまい、皆から怖がられるわ嫉妬されるわ神官はあからさまに優遇するわで大変なようだ。神殿内には友達がないうえ神官たちは甘い顔をするばかりで役に立たないとなれば、どこかで一人でいる他ない。少年は私の傍を選んだらしい。

しょんぼりとした様子で膝を抱える少年を見ながら、私は悩んだ。

私も手伝えるなら手伝ってやりたいのだ。でも私までこの子を優遇してしまえば他の子たちはどう感じるだろう？更にこの子を敬遠いやしないだろうか。この子の未来を逆に奪うことになりやしないか。私は逆立ちしてもこの国の『聖靈様』といつ立場に変わりない……神官の顛願とは影響力がケタ違いなのだ。

少年を助けようと決心したのは五日後のことだ。少年が私の影に隠れるのはここ数日いつものことだったが、彼は泣いていたのだ。ぐずぐずと鼻を鳴らし私に寄りかかり、縋るように『聖靈様……』なんて言われたら私だってほだされる。妹の姿でも良かつたけど光の玉として少年の前に現れれば、彼は私を見て口を半開きにした。

「少年、どうして泣いているんだい」

大神官が少年を蠶殻して甘やかしているというが、前々代の大神官は金より食い氣だつたからまだ可愛げがあつたのに今代の大神官は花も欲しい団子も欲しいといついけすかん奴だ。自分の手元で少年を育てたら将来儲かるに違いないとか考えている肉饅頭なんぞ肉屋で売つても安く売り捌かれるに違いない。私は手を伸ばして少年の頭を撫でる。

「えつ、聖靈様……？」

「そうだよ」

少年はなかなか将来が樂しみな顔立ちで、もしあの大神官がこの子の将来じゃなくて尻を狙つていたりしたら今すぐ王でも誰でも良いから人のいるところに行つて大神官のあることないと言ふらしてやるう。

「大きな力が怖いのかい？ 人を傷つけてしまうことが

頭をなでたまま言えれば口クンと頷く少年。素直だ……王族とは大違いだな。あいつらは人の話をさつぱり聞かん。それ讓人を傷付けることを怖がる怖がらない以前に無意識で傷付けていたから性質が悪い。

「私が使い方を教えてあげよう」

『神の恵み』の塊である私が教えるんだ、どうすれば効率良く力を使えるかは私自身が良く分つていて。さあ、最強への道を歩むのだ少年よ。大丈夫、『神の恵み』が付いてるから問題なし！

「良いんですか？ 僕なんかに教えて下さるだなんて……」

少年は目を潤ませ私を見上げる。少年の目には私はただの光の塊としか映つていないので、だから私の表情が分るはずもないが、私が苦笑したら安堵のため息を吐いた。雰囲気で分つたのかもしね。少年は『神の恵み』について知つているかい？

「マナ、ですか？ 知ないです」

そうだな、先ずは魔法使いが生まれた理由から話そーか。

その5・私、少年になつたひと（後書き）

少年の名前を募集します。どなたか少年の名前を考えててくれませんか？

鷺見にはネーミングセンスがなく、いくつか考えてみましたが全然似合わず断念しました。ヨーロッパ風の名前なんて嫌いだ。和風の名前だったらまだいくつか考え付くのですが　と言いつつ、主人公の下の名前もまだ考えていないんですね。名字だけは決めましたが、名前だけが決まらない宙ぶらりんです。これもついでに考えてくださいると助かります。

その6・私、仕事を語ること

天地創造って言つと新興宗教みたいで嫌なんだけど、実際にこの世界を作つたのは神様なわけ。信じられない？ 信じたまえ。そういうことになつていいんだから。 で、ただ作つただけじゃ不毛な土地が広がるだけだから種を作ることにした。それが初めの植物。次に作られたのは水にすむ動物で、それからハ虫類とか鳥類とかの卵生動物。最後に胎生動物を作つて終わり。 なんだけど、ただ作つただけじゃ同じことを繰り返すだけの機械みたいなものにしかならなかつたんだよね。つまり生まれて育つて交わつて産んで死ぬ。ひたすらそれを繰り返すだけの世界には当然飽きが来るもんで、神様は『進化』を促すこととした。つまり種類を増やさせて多様化させようと思ったのだ。

でも放つておいても進化するわけない。 そう『作つちゃつた』んだから。だから全ての生き物に行き渡るように『一部の遺伝子情報を壊す』成分を光に混ぜて注ぐことにした。もちろんそれだけじゃ進化じゃなくて退化して行く一方だから『遺伝子を修正しつつ直す』成分も入れておいた。

壊す成分は量が少なくても問題ないけど、直す成分は壊す成分以上に必要だからどうしても過多になる。多すぎたら多すぎたで良いかなと思つたらしいけど、とりあえず自分が調整しながら進化を見守つていこうと神様は考えた。で、その調整するための基点が私が今憑いている宝岩だつたりする。余つた直す成分を吸収し、貯蓄することで大気中の直す成分 つまり『神の恵み^{マナ}』の濃度を一定に保っていた、のだけど。ある日、いつまでも神様自身が調整していたら自分の思つたような世界にしかなりようがないと氣付いたらしい。 そうだ、他人に任せよう！ と。

長い年月一人ぼっちでも問題なさそうで連れて來ても問題ない魂を探していたらしい神様は、ちょうどトラックに撥ねられて死んだ

私に目を付けた。戦争を好むような人間でもないし趣味はネトゲの街作り、生にそれほどしがみ付いていない（ついでに今しがた死んだというオマケ付き）　本当にちょうど良かつたらしい。

そして私は（何の説明もなく）聖靈様にされ今に至る。なんのフオローもなかつたから始めこそあの野郎と思わないでもなかつたけど、一度死んだ命だし生きている（？）分だけ儲けもんだと開き直つたら気にならなくなつた。ただ人恋しかつただけで。数週間でエルが現れたのは本当に幸運だつた……エル以外で私のところに来た人間いなかつたんだよ、五年くらい。その点ではエルに感謝しても良いかな、その点だけは。

とまあ、神殿関係者が秘匿しておきたいだらう部分や個人的な部分ははしょりつつ話す。少年もこの国を建てた高祖がとても残念な厨二病患者だつたなんてことを知りたいとは思わないだろうし、もし話したとしてもただの愚痴になる気がした。

少年は難しい顔をして唸り、頭を搔きながら伏せていた顔を上げた。

「えつと……じゃあ、そのマナでいうのが沢山余つたから、僕たちの体質が変わつたってことですか？」

「うん、そうそう。でも体質が変わつたというより新しい機関ができたつていう方が近いかも知れないな」

たとえば腕が一本から四本に増えるようなもんだよと言えば少年は恐怖で顔を凍らせた。　どうやら喻えが悪かつたらしい。腕が四本つてのは怖いのか……顔が三つで腕が六本ある元武神を「アシユラたん萌え！」と萌えキヤラ化している日本人でもなきや受け入れ難かつたのかもしれない。私なら腕が四本あるならもう一つ顔を付けると注文するけど、少年には怖い話でしかなかつたみたいだ。

「あー……うーんと、少年は腕が一本じゃ不便だと思うよね」とりあえずフオローしておこう。

「うんと、はい。不便です」

「そう。人間は腕が一本あるから色々なことができる。じゃあ三本

あつたら、四本あつたら、もつと便利になるとは思わないかい？」
まあ、そんなことになつたらマルチタスクが必要になつてくるけど。右手と左手に別々の動きをさせようとするのは中々骨が折れる。しかし少年がそんな現代知識を知つていてははずもない。頭に添えていた手を顎に滑らせ、少年はうーんと首を傾げた。大は小を兼ねると言ひはするが大きすぎるのは逆に不便になるけど、今言ひたいのはそんな話じやない。

「思います」

「魔法を使えるというのは見えない腕が出来たようなものと考えれば良い。その腕をどう動かすかをちゃんと知れば力の暴走も起きないし今以上に便利になる」

なるほどと何度も頷く少年の旋毛を見ながら、さてこれからどうしようかと考へる。何か呪文とかあつた方が良いだろなあ……魔法の呪文とか、私に厨二病患者になれといふのか？ こつぱずかしくて穴掘つて埋まりたくなるわそんなこと。教えると決心したならしだでもっと考へてから行動しようと怒られそうだが、どうせ私は元から行き当たりばったりなんだからさして気にするほどのことじやない。 とりあえず、今私がするべきことは。

「さて、だいぶん時間を食つてしまつたようだな」

廟の外を見てみれば日はだいぶ傾いていた。おやつ時に少年がここに来たことを思うと長い間話していたようだ。もう夕食の時間だらうし、長時間姿の見えない少年をそろそろ神官が探しに来るかもしれない。途中半端に行き当たりばったりな知識を教えるより明日話す方が良い。

「神官も心配しているだろ、お帰り。また明日教えてあげよう」

今晩は呪文をどうするかで悩まなきやいけないから、とりあえず少年よ、帰つてくれ。

その6・私、仕事を語ること（後書き）

文字数は2222だそうです。キリ番つて良いですよね。

少年の名前は依然募集中です。一つ候補を頂いて万歳三唱しました。ついでの主人公の名前も募集中だつたりします。

その7・私、呪文を考えるの」と（前書き）

しばらく開きました。なんだかひとつ出来が悪い気がしますが、何とかおかないと冷静に推敲できません。

その7・私、呪文を考えること

人間だつたころ、英語はまあまあの出来だつた。とても良いとは言えないけどだからと呪つて悪いわけでもない平均値ちょっと上。だけど　流石に三百年近く英語から離れてると思いつかせるはずもない。カタカナ英語ならまだどうにかなつても、普段使わない単語はもうすっかり忘れてしまつた。

魔法の呪文を英語にして『ファイア！』とか言わせようかと初めこそ考えたものの、単語に関する記憶が頼りないから諦めることにした。もう日本語を呪文にすれば良いだろう　ちょっと痛々しいことに目を瞑ることにして。

この世界に来て三十年くらいしてから氣付いたことだが、どうやらこの世界の言葉は日本語じゃない。そりや異世界だから当然なんだけど十年単位で気付かなかつた。どう見ても相手がしゃべつている口と私が聞く言語の間に差異があるのだ。自動翻訳機能だろうかと思つて集中してみればその通りで、きっと神様が言語で困ることがないようにと、少ない頭を捻つて考えてくれたんだろう。それはそれで嬉しいが、それよりも先ず私の意見を聞いて欲しかつた。問答無用で聖靈にするとか、私の人権はどこへ行つた？

で、相手が話している言葉を覚えようかとも思つたけど面倒だつたから止めた。どうせ自動翻訳機能が働いているのなら、わざわざ覚える必要なんてない。それに私は訳の分らん言語よりも日本語を聞いていたかつた。

で、だ。つまりこの世界では日本語は『存在しない言語』だということだ。外国語というものはなんとなく恰好良いように聞こえる気がするし、多少発音がおかしくてもそれに気がつく人間などこの世界には私以外に一人もいない。実のところ呪文なんてどうでも良く、本人にとってイメージが湧きやすい言葉であればどんなものでも良いのだ。とりあえず『私にとって』分りやすいものにしたがそ

のうち自國語に直す運動とかが起きるだらう。

さて、漫画の記憶もあやふやだから漫画からネタを引っ張つてくるのは無理だ。なんとなく覚えていて漫画の技そのままになることがあるかもしれないが。少年が来るまであと数時間しかないから早く考えなればならないのだが、そう思えば思うほど何も出でこなくなる。『想像すれば思った通りになる』とかは、見本があるからこそできることだと思つ。言葉がなくても脳内のイメージを投影することで魔法を使つているんだ、きっと。

投影　そんな名前の魔法を使つた漫画だか何かがあつたと思うが、もう覚えてない。そういうえば現世は『本質界の陰の投影である』とかいう考え方があつたはず。プラトンだつたかソクラテスだつたかは覚えてないが、そんな考え方を誰かが主張していた、はず。確かに『それぞれの存在のひな型であるイデア』が本質界に存在するから私たちはその物質が何なのかを判断することができる、とかいうものだつたと思う。

せつかく呪文を唱えるなら何か恰好をつけた方が良いだろ。よし、決めた。呪文は『世に のイデアを投影する、云々』で良いだろう。なんだかそれっぽくて恰好良い ような気がしないでもない。

「『世に水のイデアを投影する、凍る大地』みたいな」

効果があると確信しつつ地面に指を向ければ床に氷の膜が走る。あまりイメージを固めることなく作ったからか白濁した氷で、記憶の中の氷とは透明度がまるで違つた。ため息を吐いて氷を溶かせば、溶けた水は地面を濡らすことなく気化した。

「んー、まあとりあえずこんなものかね」

私は無事一仕事終えることができたよつな爽快な気持ちで背伸びを一つした。実体はないから肩が凝ることはないのだが、実体があつたときの癖は何年たつても抜けないものだ。

ついでに、私は途中で放り出して『後は自分で考える』と言つてしまふ。自分が教えると決めたくせに無責任な奴といわれるかも知れない。

もしけないが、魔法といつのは本来自分たちで高等なものにしていくのが正当な進化なのであつて私の介入は本来ないはずのものだ。

それをちよつと早める手伝いまではするが魔法体系の完成まで付き合つつもりはさらさらない。言つなれば『応援している』だけだ。

「聖靈様！！」

そんなことをつらつらと考えていたら、少年が来る時間がきていたらしい、少年が笑顔で廟に駆け込んできた。

「おー、よく来た」

彼から私が見えるようにして現れれば顔をパアと明るくする少年。そういえば少年の名前って何なんだろうか。呼ぶ時はどうせ少年と呼びかけているから不便ではないが、名前があるのだからそつちを呼んだ方が喜ぶだろ？まあ、名前を聞くのは面倒だからすぐにはしないが。

「良いか少年、要はイメージだ、イメージ。想像するんだ。どんな結果を望むのか想像しながら唱えるのが一番の成功への近道だ」

「はいっ！」

「じゃあ私がまず見本を見せるからね。『世に水のイデアを投影する、凍る大地』」

「す、すごい……！　すごいです、聖靈様！！」

「ハハハハ、凄いだろー」

後から考えればかなり痛々しかつた　いや、魔法使いという時点で痛々しさはにじみ出ているのだが、考え方は『厨二病患者力モン！』な出来だった。だがだからと言つてほかに何か考え付くかといえばさっぱり思い浮かばず、思い出せる魔法の呪文にできそうな英語は『ファイア』『ウインド』『ブリザード』くらいだったから仕方なかつた。

その7・私、呪文を考えるの！」と（後書き）

少年の名前はリヒトに決まりました。沢木遥様ありがとうございます！

主人公の名前はいまだ考え中＆募集中です。

その8・私、ため息を吐くの」と（前書き）

週一連載と固定した方が良い気がしてきました。

その8・私、ため息を吐くの」と

神様がどうして人間を作ったのかをなんとなく濁し、とりあえず神様がいてYOO達のことをずっと見守っているんだよと教え魔法の使い方を優しく教えてあげた私はいつの間にか、聖靈様ではなくご神体と思われるようになつた。曰く、神様がこの岩に降臨して少年 リヒトに魔法を教えたということらしい。なんでだ。

「神様！」

ちょっとおバカな少年リヒトは呼び方を変えるし、神官たちは伏せた顔をにやけさせながら私を拝みだしで本当に迷惑極まりない。そろそろリヒトの修行を投げ出そうと思つていてるから良いのだが。リヒトを教え始めて一年と半年が過ぎ、十歳かそこらだったリヒトは十一歳になつていた。西洋人の血だからだらうリヒトの背はメキメキと伸び、顔にはうつすらと髭が生え始めている。人間だったころ外国語の先生から聞いた『鬚面の小学生』とはこういうことかと少し悲しくなりつつ、でもそろそろお別れだと思うと清々した。ガキは嫌いなのだ。

「神様、おはようございます。えっと、僕の二ホンゴ、どうでしょうか？ ちゃんと話せてますか？」

「うん、だいぶ上手になつた」

そう。リヒトは今日日本語を話している。呪文を日本語にしたため新しく何かの呪文を作るには日本語を知らなければ不可能で、身から出た鎧とはこのことかと内心涙しながら日本語を教えたのだ。一度日本語で教えてしまつたことだし後から変えるのはばかられ現在に至る。毎回確認をとつてくるが、リヒトの日本語はかなりのものになつていてる。

「じゃあ練習を始めようか」

「はーー！」

リヒトは真剣な顔をして右手を突き出し呪文を唱える。私は口元

をおさえる準備をした。

「『世に風のイデアを投影する。荒ぶ嵐』」^{すば}

毎回噴き出すのを我慢している私は不謹慎かも知れないが、自分で考えた法則ながらなんて厨一的なんだろうか。年齢的にもちょうど良い年頃だし まあ、髭が生えているのは見ないことにして僕は選ばれた勇者なのだとばかりに恥ずかしい呪文を唱える子供の姿はかなり微笑ましかつた。美形と厨一患者は良く似ている。主に自意識過剰な点で。

どうやらリヒトは風と水が得意らしくその二つを精力的に伸ばす努力を怠らない姿には感心するばかりだが、やはり現代人の想像力とこの世界の住人の想像力には大きく差があるようだ。なんというか、少し物足りない。もつとこういう使い方をすれば良いのに、ああいう使い方はどうよ、と思いつつも言わない私は教師失格かもしれない。でも雇われた家庭教師というわけでもないしそこまで懇切丁寧にしてやる必要性もない、また私は魔法の使い方を理解する手助けだけしかするつもりがない。自分で気付くか、弟子とか孫弟子あたりが気付けば良いだろうと思つていて。

「はあ、はあ……どうでしょ、神様？」

リヒトが振り返つて私を見た。私は『神の恵み』の塊だし肉体などないから無限に魔法を使えるが、リヒトたち人間は自分の体内で『神の恵み』の精製を行わなければならないため体力が削られいく。リヒトから聞いたことによると精神的疲労も強いらしいから、きっと精神力も使うんだろう。人の身とは不便なもんだ。

キラキラとした目で私を見つめるリヒトに、まさか『見ていませんでした』と言えるわけがない。それにリヒトの実力は毎日見ているから問題ない。『神の恵み』の精製に失敗して暴走させた様子もないし、そもそも手放しても良いだろう。いつそのこと今日おサラバしてしまおうか……この一年半リヒトの修行を毎日のよつにつけてきたが、本音を言つてしまえばもう面倒くさいのだ。呪文用に色々形容詞とか教えたし、日常会話に困らないほどの日本語能力をり

ヒトはもう身に付けているし、私がまだ教えるべきことなんてもうないと思っている。あとは自分で考えると突き放しても構わないだろ？。

「うん。合格だね リヒト、もう私が君に教えるべき」とはない
「ほ、本当ですか！？」

「ああ。だから今日で君の修行は終わりだ。君はこれから自分の足だけで立つんだ」

言外に『もう私は君の修行を見ないよ』と匂わせるとリヒトの顔が紅色から真青に転落した。おいおい、どうしてそんな顔をする。こっちは貴重でもない時間を割いて君のために使ってきたんだ。有難う！」ざいましたくら言いたまえ。

「そんな神様……！ 僕を見捨てるんですか！？」

両膝をガクリと突き偶然と私を見上げる。眼球の運動が激しい。これ以上ないほど動搖しているのが分る。

「見捨てるんじゃない。卒業するんだ。いつまでも師におんぶにっこではいけない」

私はもう疲れたんだよ！ ガキの子守なんぞ本當は嫌だつたんだ！ と言つたらリヒトの中の私の理想像が崩れる気がする。私はそこまで鬼ではないつもりだ。

「うう……神様……」

リヒトが俯いて目元を「じ」と擦る。視力悪くするんだ。

「わかりました……神様」

リヒトは顔をあげ私を見上げる。今私は光の玉だから「に」に田があるとか分らないんだろう、リヒトは微妙に私の眼の位置からずれた所を見つめ、「ガクリと一つ頷いた。

「神様から、卒業します」

「うむ」

「さ……」

さ？ リヒトの田から新たに涙がじわりじわりと浮かび、零れそうなほど田尻に溜まる。

「さよならあ　　！　！」

泣きながらリヒトは走つて行つた。前を見ずに走つて神官に正面衝突し横の階段から転がり落ち、足の骨を折つて一ヶ月の間安静にせよとの診断が下りた。騒がしいガキだつた……仲間外れにされて泣くおとなしい子だと思つていたら意外に騒がしいガキで早く次を教えるこれは何だと私を質問攻めにし、疲労困憊　肉体がないから精神的なものだが　　した私に笑顔で『また明日！』と言い捨てて帰つていくような奴だつた。ついでに言えばお礼を言えないガキだつた。最後くらい言うかと思ったが、最後まで言わなかつた。

「……もう人間に関わるの止めようかねえ」

この世界の人間たちはみんな、個性がありすぎて困る。

その9・私、懐かしい顔と会つのこと

「ささいばかりだったリヒトだが、やはりいるのとしないのでは違うというものだ。この一年半で私はリヒトに引きずられてしまったのか、慣れたと思っていたはずの『会話相手のいない生活』に物足りなさを感じていた。確かこれを人は寂しいというのだったか。頭のどこかでリヒトが来ないかと期待してしまっていることに顔をしかめる。リヒトはもうここに来ないだろうか。もし来たら……」

「リヒト兄ちゃん、二ホンゴ教えて――！」

「よし、僕が教えてあげよう！――」

いや、やっぱリヒトなどいらんな。

ちびっこたちの求めに応じ、私の収容された廟の前にある広場でリヒトによる日本語講座が行われる。なんと言えば良いのだろう、リヒトの言葉が押し付けがましく偉そうだ。私の教えを受けたという巣殻の結果だと考えると後悔するばかりだが、ああ育つたのは本人の元々の性根もあるからそこまで私が気に病むこともないだろう。それにリヒトはまだ十二歳なのだ、有頂天になつてしまつるのはしかたない。

リヒトは嬉々として年下の子供たちに教え始め、年上の子供たちは自分より年少のリヒトに訊きに行くのは自尊心が許さないのか遠巻きに見るばかりだ。さつさと聞け、聞くは一時の恥聞かぬは一緒の恥というだろうが。だがまあ、気持ちが分らんでもない。あのむかつく餓鬼に頭を下げるのはかなり嫌だ。

「あの餓鬼がもうちょつと頭良ければ良かつたんだが……」

「子供とは總じてそういうものですよ」

「いや、昔はもつとましだつた ん？」

今代の大神官は前代の大神官を謀殺した、あんまり私の気に入らない奴だからあいつの前では私は絶対に出ない。リヒトが大神官に手を引かれてやつてきた時だつて岩の中に隠れてさつさと帰れと念

じていたくらい嫌いだ。前代と前々代は良かつた。良かつたんだ。

「大神官……？」

そして、私の背後に立っていたのはその前々代の大神官、無類の果物好きだった面白い奴だった。死んだとばかり思っていたんだが。生きていたのか。

「お久しぶりですねエ、十年ぶりでしようか」

この男、魔獸クンたちが現れ始めた時の王、なんたらくんたら王とかいう奴の幼馴染だ。目の奥底には達観に似た諦めが宿り、口元はどうにでもなれと言わんばかりの苦笑が浮かんでいるのがこの男の大きな特徴で、昔はピチピチの青年だったが、当然ながら今はしわくちゃの老人。さつさと死ねとは言わないがとっくに死んだものだとばかり思っていた。この時代には珍しい　というよりはありえない、八十路（くらい）の怪物だ。

「何で私が見えるの」

「いつの間にか、そうですねエ、さつと三十年ほど前からでしょうか？　どうしてでしょうねエ」

聖靈様のお力が宿つたものを食べ続けたからでしようかねエ、とか言いながら禿頭を搔く怪物　名前忘れた　はそういうれば、私へのお供え物だった果物を毎日食っていた。

「またあの味が食べたくなりましてねエ、いえ、ただの果物の酸っぱさに嫌になりました」

これからまたよろしくお願ひしますねと微笑む怪物、否、元大神官は、ギラギラとした目で私の前に供えられている果物を見ている。捕食者の目とはこういうのを言つんだろう。

「……持つてく？」

「ええ、もちろん」

と、元大神官の後ろから若い青年の呼ぶ声がし、そっちを見やれば見慣れない顔に首を傾げる。神官服を着ているが、私の前で神官の誓いを行っていないはずだからまだ神官服を着ては駄目なのではなかつただろうか。足音がしつかりしているし、軍人かもしない。

「ハウル」

どうやら若い神官もどきの名前はハウルといいうらしい。脳内検索にしゃべる火の玉が出てきたけど、ホラーものでハウルなんてキャラがいたんだろうか。よく思い出せない。

「ここにいらっしゃったんですね、探しましたよ。ご老体なのですから付き人を撒かないで下さいと何度も申し上げますのに……」

「まだ私は若いですよ、君と同じくらい若いんですから」

「まさか！ 長老様はもう八十六歳でいらっしゃるでしょう！？」

日本人の平均寿命もそれくらいじゃなかつたか？ 現代日本人と同じくらい生きるとは この時代では本当に怪物でしかないぞ。この爺さんが大神官をしているうちに三回国王が変わつたし、そしてついこないだも傀儡政權だらうとしか思えない五歳児の国王が立つたばかりだ。まああの餓鬼も、私が見る限り今までの王族と同じく人の話を聞かない天才ならぬ天災なんだが。

「ふふふ、聖靈様のご加護のおかげですよ」

「え、え……」

「それにしても、私が旅に出ている間に神殿は変わりましたねエ」

周囲をグルリと見回し『全国津々浦々果物を巡る旅なんて出ない方が良かつたかもしません』とかうそぶく元大神官に、こいつはそんなことのために大神官の仕事を止めたのかと頭が痛くなつた。私のせいなのか？

「ところでハウル、その格好は一体何ですか？ 君は私の護衛役であつて神官見習いではないはずですが」

神官服を着ることのできる条件として、私の前でお決まりの誓い文句を唱えそれを守ることを宣誓する必要がある。私としては勝手にやつてろとしか言ひようがないが、神殿関係者からすれば見逃せないことらしい。

「あ、これは大神官殿が神殿にいる間はこれを着用せよと仰られたので。軍服はやはり神殿内では異質なんでしょうか」

「そんなことはありません。例えとしては不適当ですが、かの王は

「存命の時、魔獣退治から着替えぬまま聖靈石に会いによく来られていきましたから」

血のにおいをふんふんさせながら『何故顕現して下さらぬのか、聖靈様！』とか睨みつけながら言われたからなあ……あれと会話するのは嫌だつたし、それに血の匂いが濃くて近寄りたくなかった。岩の中に引っ込んで、そう言えばこれリアル天の岩戸だとか考えていた覚えがある。流石に五十年前のことだからもうあんまり覚えてないが。

「神官の誓いをしておらぬ者に着せるほど神官服は安いものではないのですがね……あの馬鹿、おつと口がすべりました 大神官殿は何をしていらっしゃるやら

「これってそんなに金かかってるんですか？」

「ここにも種類の違う馬鹿がいたのでした……さて、ハウル。大神官殿の元へ案内してください。いえ、先に行つて私が向かっていることを伝えてくれますか？」

元大神官は前から思つていたが口が悪い。王族のほとんど全員は人の話を聞かない嫌なスルースキル保持者だから、この男がさらりと毒を吐いてもそのまま流していた。耳聴いというか王族の中ではマシな奴等（人の話を聞かないのが王としての資質だとでも思われているのか、そういう人間は王になれず臣下に下つていく。物凄く残念）はこの元大神官の言葉に目を剥いたり肩を震わせたりしていつが、ほとんどは自分に良いように解釈してスルーしていた。こんな王族で良かったねと言うべきなのか彼を王族がこんな人間にしたと同情するべきなのか分らない。

「はいっ！」

元大神官の言葉を聞き流したのか聞き逃したのか、ハウルはビシリと敬礼した。長い袖が勢い良く振られて顔に当たり、彼の頭の殘念さをとても悲しく思わせる。軍人らしくガツガツと歩く様子はなんだか微笑ましいが、脳みそまで筋肉に侵されていることを考えるとハンカチ一枚では足りない。

「では頂いて行きますね」

「あー、うん。面倒事は起こさないよ!」「元大神官は返事を待たずに果物の入った籠を取り上げ、私の言葉に意味深にニヤリと笑むと怪しい笑い声を上げながら去つて行った。

「なんか、何か起こりそうな予感がする……」
そして、その予感は当たるのだ。

その10・私、必死に考えるの」と

元大神官が倒れたという噂は神殿内を駆け巡った。帰ってきてすぐには病氣で臥せるなんて、と皆さんは大混乱だ。もう年だからないんじやないかと私はこつそり思つたけど、周囲の方々は八十まで生きたんだからまだ生きるに違いないと思い込んでいるらしい。まあ、見るからにピンシャンしてあと二十年は死にそうに見えなかつたらそう思うのも仕方ない。老化によるガタといつもの突然現れるものだ。

今代大神官は私に必死に祈りをささげ、何を祈つてゐるのかと思えば元大神官の回復だつた。あんまりに必死な様子にちょっと意外だ。黒幕はお前だとばかり。いや、あの男のことだから仮病を使つているのだと思つて見舞いという名の確認に行つたんだけど、本当に真つ青な顔をして額に濡れタオルを置かれていた。本当に何か悪いものでも食べたみたいに下痢と熱の症状を出している。一体どうしたんだか。

「ああ、神様。助けてください……前々代様をどうか、どうか」
原因がこの男ではないようだし、一体何がどうしてこんなことになつたのやらさつぱり分らない。元大神官は熱に浮かされながら「ああ、あたつた……まさか……私が」なんて呟いている。何が当たつたんだか。何の予想なんかさつぱり分らない。もしかして今代大神官が前代大神官を殺した方法の予想とか？でもそれだと話が繋がらない。もしこれが合つていたら「まさか私が」に続くのはきっと「まさか私までが暗殺対象になるなんて」だろう。今代大神官は原始的な方法で火を付けそうなくらい手をすり合わせて祈つてゐるこの男がしたとは思えない。

他に考えられるのは神殿外部、つまり王宮のいざこざだ。ついこの間五歳の国王が立つて、外祖父筋が傀儡政権にしようとながら失敗している。王族はたとえ親族の話でも右から左に聞き流して自

分の好き勝手するのを知らなかつたのか、それとも一縷の望みをかけたのか。後者かな。後者だろうな。

でも外部がどうして元大神官を狙う必要があるのかが謎だ。たとえ元大神官が王家中でも特に人の話を聞かなかつた……じゃない、武勇に優れた名君 ということになつていて。歴史つてこんなものだつたのか の 親友 本人は笑顔で否定しそうだ だとしても、今代の王に意見して聞き入れられるかというとそうでもない。元大神官はスルースキルを持つていて、あつて人形繰り師の資格を持つていてるわけじゃないんだから。一応建国に携わつたことになつていてる私の話も聞かない王族だぞ、一個人の話を聞くわけがないじゃないか。元大神官が今代の王の外祖父筋から王族を上手く操る方法を乞われて教えなかつた、なんてことは起こり得ない。何より元大神官が神殿に帰つて来たのはつい昨日の話で、会うことは不可能だつた。接触など全くないのだ、恨みようもなければ足に縛り付きようもない。

「ああ、助けてください神様！！」

今代大神官がハラハラとあんまり美しいとは言い難い顔を涙でぬらす。可哀想だが、私にも分らんものはどうしようもない。ただ元大神官の快復を待つていてるしかない。

そう言えば私は癒しの塊なのだつた。元大神官をここに連れてくればすぐに快復するんじやないか？ ただそれを誰に言つかだ。誰に言おう誰に言おう……リヒトで良いか。

「リヒト、リヒトー！」

私の活動範囲は狭い。せいぜい神殿内くらいしか移動できないが、リヒトを探す位なら全く問題ない。今はきっと他の子供たちと一緒に寮にいるだろう。元大神官が病に倒れたんだ、室内で大人しくしてろと言われているはずだ。

「リヒト、キミに決めた」

「え、神様！？ どうしたんですか！？」

寮のプレイルームらしき大きな部屋でドッジボールをしていたり

ヒトに声をかける。なんというか、元大神官が生き延びようが死のうがお前たちには関係ないだろうが自肅しろと言いたい。近くで苦しんでいる人がいるんだから。

「お前に伝言を頼みたい。今から元大神官の部屋に行き、そこにいるだろう元大神官の従者ハウルにこう伝えてもらいたい。『今すぐ元大神官を聖靈岩の前に連れてくるように』と」

「元大神官様？」

「うむ。神官に訊けば教えてくれるだろうから、早く行ってくれ」「わ、分りました！」

リヒトはなんだか嬉しそうにしながら部屋を駆け出て行った。私がゆうゆうと岩の元に戻っている間に神殿内は騒がしくなり、担架だキャリーだなんだという怒号まで聞こえてきた。そういえばここまで連れてくる方法なんてさっぱり考えていなかつたな。今代大神官は眉間にしわを寄せて走ってやつてきた神官を捕まえて詰問しだす。そりやそうだ、蚊帳の外だつたから。

「一体どうした！」

「か、神様が元大神官様を聖靈岩の前に連れてくるように」と仰られたそうです！ リヒトがそう仰ったと申していましたのでつ

「そ、そつか！ 元大神官様は助かるのだな！？」

「たぶんそう、かと」

「そとかそつか。なら良かつた 良かつた……」

そんなに不安だったのか、大神官。そりやあ元大神官が死んだ時真っ先に疑われる地位にいるからな。前代はコイツの指示で殺されたんだし。

大神官は長嘆息すると、肩を丸めて頭をがくりと下げた。心労で禿げそうな勢いだったから当然かもしれない。そして、何かに気付いたのか「ん」と声を上げた。

「おい、お供えの果物はいつ変えたんだ？」

「はい？ 私は存じませんが」

元大神官が持つて行つた。嬉しそうに。

「そりが……。ああ、実は今回のお供えものの中には完熟したモノを食べば中毒症状を起こす果物が混じっているらしくてな。捨てる時は燃やす様に言つつもりだつたんだが」

……元大神官が持つて行つた。嬉しそうに。

『当たつた』といるのは、これ、か。神殿から担架で運ばれてくる元大神官を見ながら、私はとても、生ぬるい気持ちになつた。これは、ああ、不幸な事故だ。うん。

その11・私、少し優しくなるのこと

元大神官が食中毒でお亡くなりになつて早数カ月、私の日常はとても平穏だった。話しかけてくる者なんていないから静かでゆつたりとした時間が過ぎている。

「ああ、静かつて素晴らしい。元大神官は残念だつたけど」「勝手に殺さないでくれませんかねエ……。私はもうピンシャンしてあります」

「うん、君が不死鳥のように蘇つてくれたおかげで私の前は大盛況だよ」

(元) 大神官の奇跡的な快復のおかげで、聖霊岩の前に行けば病気が治るなんて話が広まつてしまつた。間違いじやないんだが、こうも連日押し掛けられるとても迷惑だ。主に私の精神安定上に於いて。今日は私が休館日だとこの男に煩く主張したおかげで静かだが、昨日までの私は何かしらの病に悩んでいるらしい貴族の大行列の目的地と化していた。

「良いではないですか、神様なのでしょう? 民の平穏を配り歩くのは望みどおりでしょうに」

「神だと自称した覚えは全くないのだけどね。ついでに私を神だと言いだしたのはあの大神官だよ」

何故か茶飲み友達 私は飲めないからただひたすら元大神官が飲んでいる姿を見るだけなんだが となつた元大神官の視線を無視してあらぬ方向を見つめる。なんと言えば良いのだろう……リヒト以外に話し相手が出来たことを喜ぶべきなのかもしけない。でもこんな腹の中にどす黒いものを持った老人と楽しい会話をしたいとは全く望んでいなかつたのだけれど。

「神殿の権威を上げたかったのでしじうねエ。聖霊様と呼ぶより神様と呼ぶ方が偉そうですから」

「中身は一ミリたりとも変わつてないんだけどなあ」

お情けというか、『一応』私の前に置かれているカップには冷えた紅茶もどきが静かな水面を見せている。クッキーは元大神官が減らすばかりで私の口には一枚も入つてない。

「人間は形や名前を大事にするんですよ」

「そうだね」

良いじゃないか、名前がフーミンでもグロシャブでも。名前なんてただの記号さ、私の名前何だったかな。

「そう言えば聖靈様のお名前はなんとおっしゃるんです?」

「何だったかな……」

呼ばれることなんてないし、名乗ることもなかつたし。覚えてる方が難しいと思うんだよ。

「おや。お忘れになられた、ということですか」

元大神官は目を丸くした。そりやそうかも知れない。普通、自分の名前を忘れるなんてこと記憶喪失でもない限りないだろうし。

「うん、この姿になつてもうウン百年だからな……。呼ばれることがなかつたもんだからいつの間にか忘れてしまつたよ」

百年くらいならまだ覚えていた　かもしれない。自信がないからどうとも言えないけれど、数十年で自分の名前を忘れるほどじやない。thoughts

「そうですか。……ではセイ様とお呼びしましょうかね?」

「話題の飛翔が激しいのは老化かね?　今まで通り聖靈様と呼んでれば良いじゃない」

「いえ、聖靈様とわざわざ言つのが面倒で」

「このジジイ……」

元大神官はいけしゃあしゃあとそう言つて笑んだ。元大神官の皺だらけの顔に老人らしい愛嬌があると思っていたのは私の一方通行な愛情だつたらしい。

「まあ良いよ。聖靈様とでもセイ様とでも、好きに呼べば良いさ」

「そう致しますよ」

外の明るさとは違ひ微妙に薄暗い廟の中、宙に浮いた私と椅子に

座った元大神官は長年の友人のように話した。まあ私からすれば元大神官は六十年以上見守ってきた相手であり、元大神官からすれば私は三十年ほど見つめてきた相手だ。会話などその数十年の間に一言たりともなかつたが。

よくよく考えてみれば私も元大神官も互いの名前を知らない。私は名前を忘れたし元大神官は名乗つてない。だがそれで良いように思える。知らなくても問題ない。

「そう言えば。元大神官が食中毒で倒れた時に大神官が手の皮をすり減らす様にして祈つていたな」

残り少ない髪の気が更に切なくなるんじゃないかと思うくらい熱心に祈つていた。傍目に見て物凄く哀れだつた。前代に大神官の地位を横から搔つ攫われたことを恨んで月夜ばかりと思うなよアタックをしかけたあの男だが、考え直してみれば欲望に忠実で分りやすいことこの上ないと言えなくもない。実はあの男はあの男で神経性胃炎を持つ病に持つて頻繁に赤い液体吐いてることも知つてゐるし、ストレスのせいで肥満気味なのも知つてゐる。ちょっと闇討ちしたことを除けば可愛げのある奴なのだ。まあアレを可愛がろうと言う氣は起きないが。

「まあ、巣立つたとはいえ師弟でしたし、今私に死なれると一番困るのが彼ですからねエ」

「元大神官は首を傾げながらそう言いだした。

「王宮も一部の者達が好き勝手しているせいで乱れていますし、国王陛下もまだ幼くそれを纏められるだけの力がありません。外祖父である右大臣が必死に王位を守ろうと奔走していますがいつまで体力がもつやら」

私の中での外祖父つてのは藤原家の傀儡政権だつたんだが、ここでは微妙に違うようだ。 と言うより前提が異なつていて。王位が盤石じやないものだから、外祖父として権威を振うことが難しいのだ。先代が側室を五人も十人も取つたせいで熾烈な政争が起きており、隙を狙う王位継承権保持者達（と言うよりその母親たち）が

虎視眈々と王位篡奪をもくろんでいるという。滅多な政策を打ち出してみる、すぐに国王の外祖父として得た地位を失くすというバッドエンドが口を開いて待っている。それも、今代は側室の子供なのだとか……知らなかつた。正室にも息子がいるらしいんだけどその息子はまだ四歳、三年前に王位についた今代国王は今八歳。巻き返したい正室、このまま地位を守りたい側室　　国王に冠被せるのは大神官の役目で、大神官はあつちからチクチク、こつちからもチクチクという針の筵にいるのだと。ストレスで生え際が後退するくらいならさつさと引退するという手もあるのだが、自分でその地位を強奪したものだから引くに引けないという悲しい状況。ついでに言えば次の大神官になれるような器もない。

「自業自得か

「ですねエ」

前代ならどうにか出来たかもしれん。少なくとも現大神官よりは人徳に溢れた人だったから。彼なら心優しく野望を持たない人たちの手助けを得られただろうし、お貴族様たちを黙らせるのも楽だつたのじやないかね。今代は　　その腹の中に抱える物が灰色なくせに見え見えすぎる。今代よりもこの隣で茶を啜つている男の方が腹黒でいやらしい絡め手を使うと言うのに、今代は可哀想なくらい悪徳神官に見えるといふのだから哀れとしか言いようがない。性根が正直なんだろう、生来の氣質はそう変えられるものじゃないからなあ。それがどうしてあんなつたのやら……環境か？

「助けてやつてくれと言わないのか」

あれでもこの男の弟子の一人ではある。先代の方が才能に溢れ性格も良かつたことは確かだけれど、一番弟子と言つても良い相手のはずなのだ。

「私の手から離れた大人をどうしてこちらからわざわざ助けてやる必要があるのです？　もう部下でもないのに、そう甘えられましてもねエ」

「なるほど」

冷たいと言うと聞こえは悪いが、割り切っているんだろう。大変ならば助けを求めるべきだ。

「ああ、君。お茶のお代わりをお願いしても良いかな？」

急須を傾けても一滴しか出ず、元大神官は子供と一緒に遊んでいた下級神官に手を振つて命じた。可哀想に、真っ青な顔して走つて行つたじゃないか。

「可哀想なことしてやるなよ」

「暇そ�でしたからねエ。立つているものは親でも使えと言いますし」

優しそうな顔してその実こんな性格なんだから、今代の大神官は哀れとしか言いようがない。男色も幼児性愛も神殿では良くあることだ。少しばかり奴を毛嫌いしすぎたかも知れないな。

「ちょっとあれのところに顕現してあげようかね」

「おや、どう言つた心境の変化ですか？」

「いや……あれはあれで苦労していると考えると不憫に思えて」

変態なんてこの神殿には腐るほどいるじゃないか。無邪気な子供に性的な悪戯を仕掛ける奴なんて両手じゃ足りない。魔力保持者の教育を名目にして男児女児を集めてみたらロリコンショタコンに目覚める者が続出したとか、今さつき子供と遊んでいた下級神官も実はロリコンで顔つきがあらぬ世界へ逝つていたとかどうでも良いじゃないか。ちょっと同性愛者かつショタコンで腹に一物隠しきれないいうつかりハ兵衛なだけのあいつだけをどうして嫌えよう。

「私が降臨したとか言えば箔が付くだろうしね」

「セイ様はお優しいですねエ」

「いや、優しいですよ」

「ちょっと視野が広くなつただけなんだが。

「おおお、お茶をお持ちしましたア！」

ロリコ　じゃなかつた、下級神官がよほど慌てたんだろう、真っ赤な顔をして駆けてきた。凄いことにお湯が零れてない。自慢に

ならないだろ？ナビのお茶ぐみのプロになれるな……。

「ああ、有難う」

「いえいえいえ！」

ブルンバルンと首を振る下級神官を余所目にその場を離れる。さて
大神官の部屋つてどーだったつけ。

その12・私、心配すること

「うつかり大神官」と言つてジッ子のように思えるが、その実態は底が浅い。それがバレバレな大神官の前に顔を出してやれば、奴は摩擦熱で着火できるのではないかと思うほど手を擦り合わせ滂沱と涙を流した。純粋な子供が見たら泣き出すこと確定な顔に脂肪の腹、年齢がストレスか薄い髪。涙だけじゃなくて鼻水も出ていて汚いのなんの……。元大神官でさえ触れられない私に大神官が触れられるわけがないとは頭では分かっているものの、近寄られることも近寄ることも拒否したくなる様子だった。

土下座最中を飛ばすことも厭わない様子の大神官に内心顔が引きつる。そんなに嬉しかったのか、それとも切羽詰っていたのか。そんな彼が抱いているであろう私への夢を壊すのはあまりに可哀想で、私は眞面目に威張り腐つて声をかけた。

「人の子よ」

しかし早速泣きたくなつてきた。なんかこういう言い方は厨二臭い。というか、念話的な何かで口を開くことなく「勇者よ。悪を滅し、この世界に再び光を灯すのです」みたいなことを言うRPGの女神っぽくて嫌だ。こんな羞恥プレイ誰が考えたんだ。私が。

「はい、はい！」

「お前の元大神官を思つた祈り、しっかりと私に届いた。これからも精進し励めよ」

「コイツが両手の指紋を消す勢いで私に祈つていたのを、年単位で放置したということを気にしてはいけない。

「ありがたき幸せにござります！」

「うん、ではな」

元大神官に訊けば私は光の塊に見えるそうで、姿かたちだけじゃなく名前さえ忘れた私の外側を形成するアイデンティティというものは現在存在しない。そのうち本当にRPGの女神様になりそ

うで怖い。だから元大神官にはせいぜい私のアイデンティティ保持のため話し相手になつてもらおうではないか。どうせ暇なのだ。大神官の前からフェードアウトしながら、私はそんなことを考えていた。それよりも切羽詰まつた問題があることを忘れて。

神様神様と私の前に群がる貴族やなんやに『氣』が遠くなる。人の噂も七十五日と言つじやないか、そのうち飽きるだらうと自分で自分を慰めながらも、人口密度の高さにため息を吐く。

「神様、なかなか昇進できないんです」

こんなところに来るくらいなら仕事しない。そういう勤務態度だから昇進がますます遠くなるんだ。

「神様、あの子が振り向いてくれないどころか蔑んだ目で見ています」

あからさまに嫌われているとなぜ思わないのか。もしくはその相手がサドなのか。本人を知つていいわけがない私にどうじろりというんだ。

「神様、最近ある人を見ると心臓がドキドキいうんです。新種の病気でしょうか」

その病は私にはどうにもできません。さつさと病院に行つて医者の苦笑いをもらつて恋。

「神様、目の前を蚊が飛んでいるのに捕まえられないんです。それに時々視界の端でまぶしい光が差し込んでくるんです」

そりや飛蚊症じゃないか。網膜が完全に剥離する前にここへ来て良かつたな。

「神様、私、虫歯になりやすいんです」

歯を磨け。甘いものを控える。それしか言いようがない。

私に訊いてどうするんだと聞いたくなるものから私がどうにができる悩みまで、聖靈の上に寝転んでぐつたら過ごしている私に対し口々に言つてはいる。半分以上は聞き流しているが、残りの半分には突っ込みを入れて遊んでいる。

しかしそんな中、深夜にゴソゴソとやつてきた男がいた。人の前では言いにくい願いなのかもしれないなど横目に眺め、すぐに興味を失った。男は美青年だったのだ。

美青年という存在に対する印象はただ「最悪」としか言いようがない。妹の周囲に糞蠅か何かのように集り、強引なやり方で自分に振り向かせようとし、私を邪魔だと罵るくせに妹の前では借りてきました猫。顔も性格もしつかりしている男だつて少なからず見てきたが、たいがいの顔面に自信のある男どもは我こそが妹に相応しいと言わんばかりだった。

まあ、妹は確かに美少女だった。街を歩けば必ず芸能関係者に呼び止められ、クラス内では妹の前後左右に誰が座るか男子で争奪戦が起きるのは毎度のこと。少々お転婆な面があるがそこがチャームポイントとなつてかわいらしさを倍増させていた。

だいたい似たようなパー^ツを持つているはずの私は十人並みなのに妹は清楚で可憐な美少女ともなれば私が妹を羨んでも仕方ないことなのだが、私は毎日のように平凡な顔で良かつたと思ったものだ。なぜなら、私が美醜について深く考えるようになる以前から妹には複数のストーカーが付いていたのだ。

置き勉したら盗まれる、体育の時間にスカートがなくなっている、道を歩けば露出狂が飛び出でくる、自宅のすぐ前で誘拐されそうになる 每日顔色を真っ白にして逃げ帰つてくる妹の姿を見て、きれいな顔も大変なんだとしみじみ思わされた。

幼いころからトラウマになりそうな体験を毎日していた妹は人を見る目を育てたようで、うるさく飛び回る糞蠅共になびくことなんて一度もなかつた。その鬱憤を晴らすためか蠅共はよく私に突つかつてきたが。

というわけで私の中では美形=「ぼけナス」という方程式が成り立つており、美形なんて死に絶えれば良いのにと真剣に思つてゐる。上品な顔と美しい顔というのは であつて=ではない。ちらりと見るに当該青年は美しい顔なのであつて上品な顔ではなかつた。

「あいつさえ生まれなければ私の甥が王であつたものを……ふふ、呪われるが良い、クルトめ！」

クルトンつてスープに入れるカリカリしたパンに似た何かじやなかつたか。そんなことを考えつつ青年のすることを観察していれば、青年は私の後ろに回つて片膝を突いた。そしてノミと木槌を使いガリガリと聖靈岩を削りだした。何をしたいんだ。そして青年は小指の先くらいのかけらを三つ四つ削り取ると、それをハンカチに包んで再び夜闇に紛れた。いつたい何だつたんだか。

使用目的不明なまま持ち出された岩の欠片だが、どれだけ離れても私の一部は私の一部でしかない。壁に耳あり障子にメアリーとは私のことだ。私の一部はそのまま連れ去られており、どこぞに捨てるでもなく青年の懷中で温められている。信長公の草履みたいな気分だ。

一十分ほど歩いたか、青年は扉をノックして「イマヌエルです」と言つや、返事を待たず扉を開いた。インマヌエルつて「神は我らと共に」って意味じゃなかつたつけ？ 聖歌でEmmanuel, Emmanuel God here with usつて歌つた覚えがあるんだけれど。なんともかんとも、たいそうな名前をもらつたのね。というか、こここの世界の宗教は一体どうなつているのかさっぱり分からん。

「おじうえ！」

「ルドルフ」

青年を待つっていたのは子供の声で、四歳か五歳かそこいらだらうか。斜め下から届く声は高い。

「おじうえ、いしはどこですか、ぼくにもみせてください」
「ああ。だが先ずは座ろうか」

青年は私を取り出しながら少年を連れて歩き、どっかりと座つた。ルドルフ君とやらが隣の椅子によじ登る音がしたのち私（の一部）が御開帳。 ルドルフ君はまだ幼いだろうに性格のキツそうな目つきに薄い唇、くるくる天パの美少年で、将来は糞蠅と同類になり

そうな顔をしていると思つたとたん興味が失せた。

室内は小学校の教室一つ分くらいあり、精緻な天井画まで描かれた豪奢な部屋だった。ビロードのカーテンがかけられたステンドグラスにはどこか見覚えがあるような気がしてならない顔の女性が微笑んでいる。女性の背景には鬱蒼と茂る森に青く巨大な岩。あれ、これにもなんだか見覚えがあるぞ?

「とてもきれいですね」

「そうだな。聖靈^{セイリ}石は王家の守護石 これを媒介に呪えれば、クルトめもすぐに死ぬ」

「クルトがしねばぼぐがあひさまになれるんですね」

「その通りだ」

話について行けん。私を媒介に王家を呪うとはどういうことのかさっぱり分らない。王家の守護なんて岩になつてから一度もした覚えがないんだが……。あの話を聞かない奴等は思いこみと勘違いで行動するからな、私が守護していると思い込んでいるのかもしない。とてもなく迷惑。

「ああ、ルドルフ。きつと私がお前を国王にしてみせるからな」

「はい、おじうえ」

ここまで情報まとめみてみようか。ルドルフ君は王族だろう。この年齢、かつこの時間に王宮内にいるとなれば王族くらいしかいない。そして見たところ年齢は四つかそこら。年齢の割に大人びている言動で、クルトという名前の餓鬼 スープに浮かべるアレジやなかつたのか が死ねば、次の王になる地位である、と。もしかしてこの餓鬼、正妻の息子なのか? それ以外に思い付かないんだけれども。

「おじうえ、どのようにしてあのクルトをのろつのですか?」

「教えていなかつたか。よし、せつかくだからお前もこの機会に知つた方が良いだろう」

ルドルフ君が私をつまみ上げた。視界が少し高くなる。

「建国から続く各家にはそれぞれの守護石があることは知つている

な？」

「はい」

へー。

「我がアルブレヒツベルガー家にはダイアモンド、テーアイ家にはルビー、ディングフェルダー家にはアメジストのように、それぞれ決まっている。アルブレヒツベルガーの者がルビーを持つことは許されていないし、テーアイの者がアメジストを持つことも許されていない。何故だか分かるか？」

「いいえ、おじうえ」

アルブレヒト救助船、茶漉し、正しいフィールド。一体どういう基準で名字を付けたのか分らない。こちらの言葉が自動翻訳される私の耳にはそれぞれのご家庭の名字が愉快な変換で届く。

「違う家の守護石を持つということは、相手の家を呪うということだからだ。他家の者がダイアモンドを所有していた場合、それはその家が我がアルブレヒツベルガーを呪つっていたということに他ならない」

「どういうことですか？」

「石の守護の力を歪めているからだ。つまり、真っ直ぐ届くはずの守護の力が他家の守護の力に影響されることにより歪み、力が変質するのだ」

つまり青年が言いたいのはこういうことだ。冷たい川の水が、回し水路を経由したらぬるくなつた。冷たい川の水だからこそ冷却効果があるのに、ぬるくなつてはその効果がない そういうことだろう。にしても何で私は農業で例えているのだろうか謎だ。

「これは私が家に持ち帰り、隠しておく。分ったか？」

「はい、おじうえ」

ルドルフ君は良い子の返事だが、さつきクルトを呪い殺せば云々と言っていた。不穏だ。大人になつた時対人関係で悩むんじやないかつてお姉さんは心配だよ。

その12・私、心配するの」と（後書き）

お久しぶりですみません。USB行方不明事件はいまだ解決せず、そのまま迷宮入りするのではと思つています。エ子（USBの名前）の文字が掠れてきてエ子ではなく丁子になりかけていますが、そういえばくら寿司（USBの名前）もオリゼーに改名したことを思い出し、時間とはそういうものなのだとしみじみ感じています。ついでに、全部で三つあるUSBですが、残りの一つの名前は「鶏」です。

鷺見に命名のセンスが皆無ということは分つて頂きましたでしょうか？これからも生ぬるい田で見守つて頂ければ幸いです。

その13・私、テバカメするの」と

イマヌエルなる男が私の一部を誘拐して三日ほど過ぎたか。王宮内ではとある噂がまことしやかに流れていた。曰く、聖靈石の一部が欠けている、と。

昨日その言葉を確かめるべく神官たちが総動員され、下から上から私を確認した。ベタベタ触られることの不快感に鳥肌を立てている私と呆れ顔の元大神官、汗びつしょりの大神官が見守る中のみの跡が見つけられた。でっぱりに隠れた場所のため一目では分からぬが、探せば見つかる位置だ。トップとして私は岩を守るべき立場にいる大神官は、神官二人に引きずられて寝室に連れて行かれた。大神官として責任を取らなければならぬ彼には可哀想なことだ……せつかちにならずに十年待てば自然とその座が転がり込んできたものを。死んでお詫び、なんてことになるかもしれない大失態だからなあ、うん。

「これはゆゆしき事態ですぞ、陛下！」

茶漉し伯爵なる男はつばを飛ばす勢いで怒鳴り散らしている。誰だかが国家転覆を狙っているのだ、これは王家を呪おうとする者による陰謀である云々とじき高説を垂れ、周囲も興奮のあまりかそれに追従している。どうやらこの国では「石を媒体にした呪い」というのは本当に恐れられているようだ。周囲の貴族連中の顔色は悪い。会場には一百を超える人間がいて、馬蹄型のテーブルの向こう端つまり末席に座る人の顔はさっぱり見えない。右と左にそれぞれ百人以上いるのだから当然かもしけないけど、これでどうやって会議に参加しろというのだろうか。それとも末席の彼らはただ参加しているだけなのか。

「その通りだ。わが王家の守りたる聖靈石をけずるとは、命知らずもはなはだしいことだ」

八歳児であるはずの今上陛下は真面目くさった表情で頷いた。こ

の年齢だともつと子供らしくても良いはずだが、やはり背負つものが違うと保護者も心構えが違うのだろうか、顔つきだけでいえば二かそこりと言つても良いだろつ。

「麗しき聖靈様の御身にのみを当てるとは全く」

「陛下、聖靈様ではなく神様です」

「ああ、そうだったか。うるわしき女神の柔肌に傷をつけるとは信じられぬ」

「陛下、女神ではなく神様です。そして柔肌ではなく筋肌かと」

「彼女を傷物にした罪は深い」

「陛下……」

「この餓鬼は本当にハつなのだろうか。

「茶漉し、貴様は女神を傷物にした無礼者を見つけ、余の前に引きずり出せ。余自らそ奴を鞭打つてくれよ」

「ははっ！」

茶漉し伯爵は胸に手を当て頭を下げた。なんとはなしに会場を見回せば、間に一人挟んだ手前側にイマヌエルが真っ青な顔をして座り、そのまた三人挟んだ隣が今上陛下の外祖父筋である……えっと、誰だつけ？ が座っている。なんだ、イマヌエルって奴、偉かつたんだな。王様に近ければ近いほど偉いから、左に王の外祖父、右にその息子つまり王の叔父、左の一一番目にもう一人の叔父 と、左右の順に偉い人が座っている。外祖父の筋が偉くなるのは当然だから考慮に入れないとして、イマヌエルがトップ五位以内の家柄だと分かった。

にしても、イマヌエルの顔は血の気が引いて真っ青だ。ここまでの大ごとになるとは思わなかつたのかね？ 削つた跡さえ見つからなければ問題にならなかつたのだから安心していたのかもしれない。

「お静かに！ では次に、大神官の処罰をどうするかです」

ざわざわと波打つように騒がしい会場内を鎮めようと、さつき国王に私の呼び方を何度も訂正した男が声を張り上げた。彼はこの會議が始まった時もこうやって指示を飛ばしていたし、進行役なのだ

るつ。

「つむわしの女神を守りきれなかつた奴の罪は重い……殺してしまえ」

なんて物騒な餓鬼！　このまま成長したら傍若無人な独裁者になるんじゃなかろうか……周囲の人も可哀想に。

「陛下、大神官の仕事は聖靈岩を守ることだけではございません。殺してしまうというのは少々短絡的かと存じます」

外祖父方の誰とが眉尻を下げた。その通り、大神官の仕事は私の管理だけではない。神殿の名前で集めた餓鬼共の育成、神殿行事の運営、大神官という役職のみに任された毎朝の礼拝とか。持てる権力も大きくなるが、机の上に積み上げられる書類もその分だけ高くなる。良い事づくめなんかじゃないのだ。

「ならばこの落ち度をどうつぐなわせる？」

「罰金もしくは礼拝時以外の外出禁止　謹慎半年、でしょうか」
神官には基本的に自宅がない。職場に謹慎半年はかなり辛いと思う。

貴族社会において後継ぎ^{ヒア}とそのスペアである長男次男以下、つまり三男四男はいても無駄な存在でしかない。才能があれば臣下に養子に行かせたりすることがあるけれど、たいがいは縁を切られるのだ。しかしだからと言つて子どもを街に放り出すわけにもいかないし、放り出されたとしてもぬくぬくと育てられたお貴族の坊ちゃんが生きていける保障は全くない。そしてここで登場するのが神殿なのだ。

神殿は職員が欲しい。貴族は一応血を分けた子供をのたれ死にさせたくない。双方の希望を叶えた結果、貴族の坊ちゃんたちは神官見習いとして神殿に入るのだ。神殿に入るときに元の家との縁は切れ、手紙のやり取りも禁じられる。まだ父子の間なら希薄な繋がりでも情が湧くかもしれないけど、世代交代なんてしたらもう他人。同腹の兄弟じやないかと泣いてすがつても蹴られて終わりどころか、不敬罪で斬首もあるえる。

「半年は短すぎないか。一年はどうだ」「でも一年は長すぎでは」

「一年もの間大神官の仕事が滞るのは問題では……」

会議の席の前方二十人ほどがざわざわと話し合つ。一年も部屋に引きこもるなんて、ニートやヒッキーでもない限り我慢できないだろ？ ゲームや娯楽があるわけでもなし、運動もできないとなつたら今以上に太るんじゃないだろうか？

「では罰金と謹慎半年にしては？」

「それが良いか」

「では」

「そうだな」

罰金と謹慎半年で決まった。といつてもそれは貴族たちの意見であつて、最終決定権を持つ八歳児の許可は下りていない。皆が王座を窺う。

「謹慎一年だ」

「いえ、ですがそれでは大神官が出る必要のある行事に支障が出ます、陛下」

「代わりの者を使えば良い」

「しかし」

「豊穣祭の水わけ式はどうなさるのです」

「新年祭の新風式は」

「今代の大神官が不可能なら、大神官であつた者が代わりを務めれば良いではないか」

「それはもしゃ」

「なるほど、それならば……」

人の話を聞かないわりに、筋が通つた意見だ。そう思つていた。

「大神官への罰は謹慎一年！ それと罰金だ！」

「へ、陛下……それはあまりに酷ではありませぬか」

「大神官もまさかこのよつた事件が起くるとは思いもよりますまい」「想定外を想定してこそ、リーダーなのだ！」

格好良い！でも想定できるならそれはもつ想定外じゃないと思
う。

その後八歳児は意見をこり押しし、可哀想に大神官は一年間の謹
慎および財産の半分を取り上げられることになった。

楽しみもない一年間の強制引きこもりに加えて金を巻き上げられ
ることになり……哀れ、大神官。だけど元大神官にまで飛び火した
のは運が悪かったとしか言いよつがない。こんな時期に帰ってきて
しまった不運、食中毒にかかつた不運、すぐに出で行かなかつた不
運。

これから大変になるな、とあくまで傍観者でしかない私はため息
を吐く。老骨に鞭打つて頑張つてくれたまえ、元大神官よ。あとで
王宮から使者が来るだらうけど逃げないように。え？何の使者が
来るかつてそりやあ

「元大神官に、一年だけ大神官の仕事に復帰するようについていう命
令だよ」

「なんですか、それは」

「大神官の一年間の謹慎と罰金が決まったのさ。謹慎期間中の大神
官の職務を肩代わりしなさい、という辞令がそのうち来ると思うよ」
元大神官が嫌そうに顔を歪めた。昔していた仕事だらうに、どう
してそこまで嫌そうなのか……。

「ハウル、ハウル！ いますね！」

「はい、長老様！」

「秘境にあるという幻の桃が食べたくなりました。今すぐ旅に出ま
す。用意は別にいりませんよ、道々揃えながら行きますからね」

「長老様、突然どうされたんですか？」

「いえ、面倒事が走つて抱き着いてきそうな予感がするものでね。
ではセイ様御機嫌よう、また何年か後に、生きていたら会いましょ
う」

元大神官は私に手を上げると、颯爽とした足取りで宮城の出入り
口へ競歩した。ハウルとやらがその後を追う。

「無駄な抵抗はよした方が良いと思うのだけどなあ」

どうせ城下町から出る前に捕まるだろうに、よっぽど逃げたいの

だろう、競歩だったのがすぐに駆け足になつて遂に走り出した。

私は元大神官のことは放つておくことにして、意識を私の欠片に

向けた。もちろん誘拐された欠片ではない。

私の一部は建国以来、王冠の真ん中に居座つているのだから。

そのお外・設定資料（前書き）

大変な長らくお待たせしている拳句、やっと更新したのは設定資料です。ごめんなさい。

そのお外・設定資料

人物設定

* 私

名前はもう覚えていない。元大神官にはセイ様と呼ばれる（聖靈のセイ）。元日本人で十人並みというよりボーアイツシユだったそうだ。可愛すぎる妹のせいでの、妹に群がる男（もれなく美形）に対し醒めた感覚を持つ。フツメンと結婚できたら幸せかなと思つていたが、聖靈様として実体をなくした時にその夢は潰えた。長い年月を透明な姿で過して来たため自分の顔さえ既に覚えていない。

* 元大神官

聖靈岩の前に一晩果物を置くと凄く美味しくなることから無類の果物好きになつた男。幼馴染でもあつた国王のKYぶりや横暴ぶりに諦めというスキルを誰よりも伸ばした。聖靈の加護がある（？）果物を長年食べ続けたせいかこの時代では怪物並みの寿命を誇り、大神官代理として復職させられるまでは全国津々浦々美味しい果物を探す旅に出ていた。

* ハウル

元大神官の従者。神官ではなく、武官。頭が少し足りず、皮肉が通じない。この連載で名前がきちんと出た少ない人間の一人。

* リヒト

聖靈（私）の（今のところ）唯一の弟子であり、やはりKY。中二病患者的思考回路も保持している。お礼は言えない。謝罪も言えない。ハウルと同じくモブキャラのくせに名前がある。

* 王家の皆さま

KYの集まり。空氣読まない、自分勝手な解釈をする、人の話を聞かない。高祖であるエルの素質を濃く受け継いでいるのか『小心者のヘタレ』か『人の話を自分勝手な解釈をし思い込んだら止まらない』の二種類がいる。

* 大神宮と愉快なしもべたち

太つた中年で、あまり良い人相をしていない。ちょっと頭が足りないのではないかと「私」は危惧している。

また、貴族連中の三男以下が引き取られ愉快なしもべたち ジやなかつた、神宮になるため、一応皆さん名家の出身。しかし性的欲求を解消する相手がない（女子は神殿に引き取られない）ため、妖しげな方向に逝っている人もいる。ここ数年は子供が魔法の力を持つようになつたため制御方法を学ばせるという目的で彼らを神殿へ集めている。そのためロリコン・ショタコンに目覚めた物が後を絶たない。

* クルト

スープに浮かべるカリカリしたパンではない。言動がどうみても女たらしにしか思えない八歳児で、聖靈岩クルトンに対する執着はかなり強い。そのうち『余は聖靈岩と結婚する!』とか言い出しそうだ。

* イマヌエル・アルブレヒツベルガー

聖靈岩を削つちやつたんだぜ という猛者。甥っ子であり先王と先王正妃の息子であるルドルフを王位につける為クルトを呪つている。効果は不明。

* ルドルフ

イマヌエルの甥っこであり、まだ片手で足りる年齢のはずだがか

なり不穏な会話を平氣でイマヌエルを交わす。成長したらどんな大人になるのか不安は大きい。

何故かモブにばかり名前がある。以下は今のところ出ている背景設定。

* 守護石

それぞれの家を象徴する宝石の種類のこと。A家の者がB家の守護石を持っていると、A家がB家を呪っているということになる。王家は聖靈岩、アルブレヒツベルガー家はダイアモンド、テーアイ家はルビー、ディングフェルダー家はアメジスト が今のところ出している。

* 神^{マナ}の恵み

種の可能性を最大限に引き出すことを目的としている、神が適当に振りまいている力。主に『一部の遺伝子情報を壊す』成分と『遺伝子を修正しつつ直す』成分の二つで構成されている。紫外線のようないも。

* 聖靈岩

神が『自分が管理すると種の可能性とか進化とかないよね』と考えた結果、神が放出した大気中のマナを吸収する基点として出来た。聖靈岩に宿る人格は適当にどこから引っ張ってきた。ついでに取扱説明書もフォローも説明もなかつた。

* 呪文

「私」が適当に考えたため厨一的。ついでに日本語。もじこのあ

と日本人が（肉体を伴つて）トリップしてきたりとも”都合主義
なヒロイックサー・ガが物語られる。

* 魔物

大気中のマナ濃度が上がったため魔改造氣味に進化してしまった
動植物のこと。そのうち人間並みの自我を持つ存在が生まれてもお
かしくない。

その14・私、電波を吸収する力がある（前書き）

今日は短いです

その14・私、電波を受信拒否するの」と

可哀想だが元大神官は連れ戻された。泣く子には勝てぬと言うが泣く大人もシユールな光景だと思う。目の周りを真っ赤に腫らせた屈強な神官三人に連れられ返ってきた元大神官の顔は、彼の幼馴染でもあつた王が現役だった時に頻繁に浮かべていた表情を浮かべている。せつからくな物から解放されて自由になつたのだろうに…今だけ憐れんあげたいと思う。

神殿行事と言うものは季節ごとに必ず一回あり、一月の神風式に四月の清土の祓い、七月の水分け式、十月の拭魂の祓いがある。神風式は大神官が巨大な扇を優雅に煽いで『年度が新しくなりました。新年度ですよ』という儀式で、また『式』と付く七月の水分け式も豊穣祭を形式的に行つただけのものだ。神殿にとつて大事なのは清土の祓いと拭魂の祓いで、清土の祓いは土の穢れを祓い作物の実りを良くし　　という題目だが役に立つとはいない　　、拭魂の祓いはその一年の間に死んだ者の魂を慰め昇天させる　　ことはもちろん出来ていな　　。おかしいな、どの行事も結果的には何の意味もないじゃないか。

ところで、七月に豊穣祭つておかしいよなと私も初めは思つた。普通九月か十月だろう、何故七月にするのか、と。だがここは暦の数え方が違うのだ。西暦とは一年の始まりが違い、雪が溶けて春になつたら新年　　つまり、西暦で言う三月あたりが一年の始まりなのだ。旧暦と似たようなものだと考えれば間違いない。だいたい、元々西暦も三月始まりだったのをいつだかのお偉いさんが一二ヶ月前倒しして一月始まりにしたんだから。

今回の事件を調査するため可哀想な元大神官、じやなかつた、大神官代理が先頭に立ち、一体噂の元はどこなのか聞き取りを始めた。私はイマヌエル君周辺の女中さんから露呈したんだろうと思つてからさほど調査に興味はなく、心中で応援していた。何故か大

神官代理は被害者本人である私に聞こうとすることもなかつたし。

毎日大神官代理は私の元を訪れては去つていく　ただ、果物を取りに。見るからに暇そうに浮かんでいる私を羨ましそうなジト目で見てくる以外の被害は特にない。そしてリヒトは大神官に特に目を掛けられていたはずだが彼に会いに行くこともなく手紙も出さず、恩知らずとはこいつのことを言つのだ。私は初めの選択を間違えたのだ、もっと控えめでお礼や謝罪を言える子を選べば良かつたと心の底から思つてはいる。しかし、今まで関わってきたこの世界の住人のほとんどが一癖二癖ある変人ばかりだから『どこでも一緒』ならぬ『どいつを選んでも一緒』なのかもしれない。あれ、『いつでも一緒』だつたか。

調査を始めて三日が過ぎ五日が過ぎ、噂の出所が分つた。自称天才占い師の女中だとかで、口癖は『見えます、ああ、眞実が見えます！　眞実はいつも一つ！』だそうだ。おかしいな、この世界には変人しかいないらしい。どこの体は子供、頭脳は大人の名探偵だ。彼女は神殿と宮中を往復して手紙やら物品やらを運ぶ係りだそうで、大勢の中で働かせると他の女中を怪しげな宗教に入信させて信者を増やすかなり凄い人なのだと。それだけ口が上手いなら外交関係の職に就かせたらその才能を良い方向に發揮するのではないかろうか。私個人としてはお付き合いしたくないタイプだが。

「えーっと、君は

「お待ちください！　貴方が何を言いたいのか、私にはよく分ります。私の名前を知りたい……そうですね？」

「うん、そうですねエ。で、名前は？」

「俗世と関わり合いになることを我が神はお許しになりません……ああ、ですが、俗世では名前なる呼称が必要なのです、ああっ、女神さまっ！　この愚鈍な貴女の僕クララに呼称を名乗る許可を！！」

「クララさんですね、分りました。で、聞きたいのは

「お待ちください！」

「……うん」

「貴方が何を聞きたいのか、私にはよく分ります」

「そうですか」

「」つそり覗きに行つたら凄いことになつていて。どうしてこんな人が女中として城で働けていたのか分らない。

「聖靈の宿る岩が削られたことを何故知つているか。聞きたいのはそれでしよう」

「そうですね」

「無知蒙昧なる俗物には分りますまい、これは全て我が神の御技！愚鈍な僕であるこの私めにも我が神はお優しくていらっしゃるのです！」

「うん」

話が進まないな、これ。じつと見てみれば彼女には神の恵みを精製する機関があつた。マナの流れは脳にまつすぐ伸び、どうやら天才占い師というのもただの騙りではないようだ。占いしかできない、一点集中タイプか。

話を聞いている大神官代理も泣きそうだ。傍に控えている神官たちも怪物を見るような目で彼女を見ているし、なんともかんとも言い難い。

「我が神はこう仰いました。『我が忠実な僕たるクララよ、お前はこれから私が見せることを人に広めなければならない』と。そして私は闇の化身たる悪魔がこの世を混乱させんがため王家の守護岩である聖靈岩を削り、懷へ隠して去つていく姿を見たのです」

名前は俗っぽいものじゃなかつたのか……何故呼んでいるんだろうか。

「ふむ、では、君は神様からそれを教えられたと言つのですね？」

「その通りです！ ですから私は我が神のお言葉に従い、人にこのことを話しました」

私の姿に気付いていたらしい大神官代理がじつと見つめてくるから、首を横に振つて答える。どうせ向こうさんには私が光の玉にしか見えてないのだ。

「私は知らない。彼女はそういう力を生来持っているんだと思う」「突然体を捩つて空中の一点を睨みだした大神官代理に神官たちも慌てだした。クララ教に侵食されたのではないかと不安に思うの仕方ない。

「大神官代理、どうされましたか」

「もしやこの女が何かおかしなことでもしましたか?」

「いえ、聖霊様へ確認を取つていただけですので問題ありません。心配は無用ですよ」

「そ、ですか」

神官たちの顔は不安そうで、そりゃあこんな電波系を相手にしたら誰もがそうなるわなと思つた。これから彼女にもつと掘り下げたことを聞いていかなければならぬ大神官代理を思つと、可哀想さに涙が零れそうだった。出ないけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046o/>

何様、俺様、聖霊様

2011年9月16日13時03分発行